春雨抄 よた そ 四

番外書冊

内閣文庫
和書
類 號 冊 架
二〇六二七 一〇 二〇二函 八

内閣文庫
番號 和 20627
冊數 10 (4 10)
函號 202 182

Kodak Gray Scale
© Kodak, 2007 TM: Kodak
colorchecker
x-rite

国立公文書館
National Archives of Japan

春雨抄巻第四　　与上

一　よろづよ

榊葉や万代のためし三笠山　頓

入道
君によりて十とせの数を譲るとくらゐの山の万代やみん　定家

風雅
ゆふ風も枝をならさて万代とよふ声のミきこゆなりけり　俊成

月清集
万代の月をそ秋のひかりにて絶ぬちきりハ雲井にそみる

千載
竹の林の万代迄も見えし紋山さへこなたの色を…　右大臣

拾遺
君か為祝ふ心を万代とかそへて世ハ今日植る松　能宣

後拾遺
万代を代に重て見ゆる亀の尾成松のみとりか　資業

玉葉集
春日山岩ねの松の白代待枝に栄る家の万代のため　定家

思ひくもあらぬ身の手を契る花のさかりひさしき世に万代　雪

一 よろこひ

光悦 おのれハ学問をこのミけり候へ 論語記といふ書をよみ給ひ
又かかる説 儒人乃理と 悦乃論語とや候ひとつは

一 よるへ人

宗祇 とふ人よ思ひいれよへとかなしき月のくもりはかつてくもらされ 逍遊
肖柏 ありねそてとりもとそ来る夜のうへくわやかなる香枕をる 雅正
玄旨 思ひくもありてふ衣のゆめにかへてわれをまかせてそや数 集蓋
源氏 なさけやめりとかくかくよ人にてふ旅の月を雲かくれ

一 よそほひ

繞抱ふおやならんとおもハせ玉ひ 納の数唯なし給ふ人

一 よすか

新古今 深草の露のよすかを契りにて里をはかれす秋は来にけり 秋篠
毎日一首 伝へくる大和言葉の道ならてハ何を浮世のよすかならまし 内家
月清集 月宿る露のよすかに秋草も頼みし庭ハかれにけるかな

一 よもすから

新古今
おもすゝ昔の事をおもひつゞけゝるやうつゝまし秋の夢　通衡

拾遺
よしのやまちゝを見し事をおもひ出して恋ん涙に色そゆかしき

続古今
ねがはくば仏の道を求めれば我らがなそへにいはるあり　源信

月清集
秋もたゞ宇治の里には絶えぬ利根とも山の嶺の白雲

日
伊かゞりさしすりひのこゝろ見れ旅枕君通ふ雲路にかゝる人道[illegible]

一　よの末に　カミてミ手ナイ

古今
又月雨乃夜ことにあらば郭公何をたのしとなくなくらん

日
秋あらく指やたなびくきまて時ならぬおもかげなるらん　俊成

一　よハ

大和物語
夜ふけ出て月のかたぶく山の端に[illegible]はるかにいでし　抱之

月清集
衣うつ衣は衣の物の音や月のあまりにまたうつらん

○　よあかつき

老若
都の秋をよのかぜしろ　たのむ夜ぬれ[illegible]やて

○　よさむ

古来
雨しきる稲秋やきく人のひとつ[illegible]のおとにしるし　勝政

日
きりぎりす虫のねにして山風のたよりに里の[illegible]　行家

暑日秋思ふ秋[illegible]　巴

○　秋昼

月清集
昼の秋[illegible]昼成思の涙[illegible]

拾遺
よるの[illegible]

○○　よるの雨

東山
[illegible]月と社思ふ雲のかたはら

○ よるの道

文蔵
ひとよとてよられ家の小径に植てしも芒にも穂ある路

玉祠集
わられにハ程ある亦も宜くて也よられわきての家にむしろ　吧

月

詞花
旅立て思ひなくの宿の月　吧　無小秋のよられとる家

拾遺
いつもふよる道んおとのワりなく母ふくふよるる秋もあた家

我ふおくるもわくて浮るるハよる道ん家の秋こりも　さよ

右六首

○ よひ宵

立よりて見ん宵之の月にハ秋の月

後撰
わくおと行くさくむりつ頃まハ待宵とうハ偲ひりつくれ

待宵に更行かくも恋ぬ文とわかぬ別の鳥はをのうき　貫之

一 よころ

月清集
呉竹の葉ふきそゝのふりとる所白露もよこゝろへねまハ氷とそみる

一 よとの　古文

思俺なるむかの衾に涙するなく思ひ出の秋とのよはさわしつ　秀行

合家
月のやめ尊しとのよおとつる秘あまハ寝あさうんハひくよや　ゑもん

三府
霊霜とわくまを起と思ひとハ君かしとのふかられきまや

是ハよとのこゝろなしぬる所也思ひ秘處とを

よ所のおとこ秋夜書く此積なり

合家
萬蘭よわくぬ酒色我月詠かりけとのよ道の秋

一 秋のみしき

新詩
聞くかぬ錦や月の下葉　吽

一　朝霧乃錦や秋乃紅葉の事　日

古今
見る人もなくてちりぬる奥山乃紅葉ハ夜の錦成けり　貫之

拾遺
紅葉ゝを分つゝ行ハ錦きて家ニ帰ると人やみるらん　読人

後撰
思へともかひなしとのミいはるれハよるの錦乃心地こそすれ　俊縄

君かため朝日の山乃紅葉をもよる乃錦の心地紅緒　

一　よとの　淀野　大和

続後撰
園乃うへよりさしてゆく月の…　輔弘

是ハ淀野也

万
かりくらし行野の芒葉打なひき淀の川との月をみんかな　正衛

○　淀渡

拾
いつくとも…淀のわたりは…　忠見

袖中
みくつ…のわたりは…　兼盛

○　淀

思ふから…紅葉を流す猿河　

古今
のかりそめ淀の浪の…　内大臣

眞菰かる淀の沢水雨ふれハ常よりことにまさる我戀　貫之

日
山城乃淀乃若こもかりにたに来ぬ人たのむ我そはかなき　読人

後撰
わか事を淀のわたりにそ…ふるの杜…　読人

新拾遺
…淀の…深き…月影　為氏

月清集
…淀の…秋の月…　

新続古今
…淀乃川長…　村上法下

一　淀継橋　摂津

新後古今
舟よする…月も…淀のつき…　実為

今案ニ
定かくめや淀乃継橋よゐくゝりふ難面人今そ恋しかりける

一 よるへの水

万
うつ河ひのよるへにおきし河わきし水たにかへらぬ近妹とそなれ ぬる

眞儀抄に神の社によるへの水とて有るめ神のまへにおく水を云
きしのしたなる眞清水是を春是神水とも今云

神中
みつくきの社りしに和泉式部か
神かけてまへわすらふ誰なさへよる河のなかれて河水と云 なん

源氏よりかの菊乃家乃時中将の詞書に
斎合より注俗斎の記に
よるへの水神社遇り亀よあるゝ海のふ神主寄
行る衛新かつくとおもとてちのひ年に寄文みゝ
かん見さよりおもて神寄とあり神事と

しかへるこ猶よりちてあもつかかり

源氏
さもこそはよるへの水にみくさゐめけふのかさしよ名さへ忘 中将君

一 よろ亀

古今
よろ久なるん身をも社とて露つきせぬ君か影よ成りなき 読人

八雲 三月
なのみえとより利らし出されね舟よらも積り寄への名記へち なる 家隆

三月
わかの浦や沖津しほあひよりひ出るなき高見の寄へそよ

一 よ河のみなと 丹後

三井
よ河の湊よりふあまはの袖吧 秋の夜の塩風更る鳴く鳥 日

千載
思ふ事なくてやみまし与河の海乃天の橋立わたりみて 赤染衛門

塩風のよさの浦松音河えて月ゆけよする沖津しら波

一 よさのゝ河しみ 和泉 横山ノ堤

続後
霜枯乃横山の塩風河えぬ人音のはらさえてそあさり水鳥か 光俊

一 よこくも

横雲ハあかつきに峯の雲の体

古さひしぬかれのこゑまた　横雲たなひくとハ今別る

鶯啼かすみに雲のそら　霧かゝりつゝあけほのゝ空く

新続後
元来飛鳥山遠くたなひけり　横雲に今たなひくも云億を

新古今
横雲の風にわかるゝ東雲に山飛こゆるはつかりの声

よこ雲の消行空よりわかれても猶さやかなる清見か月の影と　西行

一 よこ嶺

家集
いつはりよそてのしき物と古松の陰ゆかしかる世をなけく哉　基俊

○ よこしま

横さまに咲宮乃梅かえ　雲乃秋乃庭の月影揺添く

一 よこ笛

日 源氏
露深き蓬の宿に古への秋に聲も思ひしれ

日
よこふえの声ハいつもかはらぬを思ひしむなしく成し音こそつきせね　大将

右大将記念に譲し笛を吹て御息所宮にとの

斉にとりましてよこふえと作つり

日
笛竹に吹寄風のことならハ末の世なかき音につたへなん

是右大将の夢に衛門督みえて此笛をハつたふへき

末乃傳へ相傳して後にかきつけたる紀を吹行也

一 よつのを
千句
よつのをや月にしらぶる琵琶の撥 鄴
和漢
忽雨ハ霰をまきしらむ枕 待書さらく窓のにと添声 日
宮漏のをけきるへりつあくし思ひ出よなる月に秋もあし 季
みちの儀君によりて事四のたらのそのよろ銀ぬる君と足摺 相国
やる

一 よ流のさゝ
和漢
思ひ初し窓の内よりは花の香をもうちそへぬ晩のくもゝ 持是

一 よ川のすみ
千句
春風も絶まくもる空のかすみ 枕 天ハ雁まて世をわかるゝ北 日
月清
ひろくみわたす川洲の水流てとある空に満潮
廣徳
四乃海風しつかなる波のうへしく浦のよるなきの月ぞ見へける

一 よ川毛 寝る也
三百首
若鷺のよるを波わけの薄雲やたなの羽をぬる白菊 家人 定家

○ よるへ
月
行く鷺の秋を乞ふ夜に成ぬらん千鳥ハ足へりさし也 日

一 よとくも
東山千句
伊川消ん吉野の奥の雪の雲收 唯戻りよふ落る瀧つを 雪
於是
よりくる花のうつくしき年月をかられさりうらちふ結びね

日
時雨つる空とはれとも思ふ事かゝる心のはれまもなきかな　兼好

拾撰
住乃江の浪よりおちてねとゝもにかゝるも君か世わたりかな

新葉
秋ふくる山の雲霧のうへすみわたるこそみえてよふかなる哉ん　俊成

一 よのなか

思ふことのなかりせはとも世中をいとはぬ人もいとさむけかり　日

続古今
世中を思ひの一夜乃宿なれや　夢のちきりもかりにそありける

新古今
世中はいつけなきものとかきくらしひとり身にそふ秋ゆふへかな　知家

拾遺
世をうき思ひ捨てし身なれはもうきにつけても花をみんとはかな　能因

新古今
世の中にはかなくなりし人の月さへなりけむそむくらむ　家隆上人

日
うきものとおもひしらすてなかめけり世中の思ひかゝりけるかな　有國

後撰
秋乃夜の月経ふるまゝに世の中にはかなき昔のあはれなりけり　為氏

風雅
猿なるもの立ちとそへて世中のやるせなき山乃奥の月

新続古今
まとひの身をはなれて世中のはかなくもすみけり

一 山路のすまゐ

住つまてうちてそ身をわすれむ　あはれ夢の世に
まよひもなしあらき世のなか　そのかみの住の山を住そ

○

一 よのなかきね

あら?乃羽はいつも露けき秋のよに夕暮ならぬ秋の空かな

一 よのなかそ思ふ

一 宮り遊ひしそのかみの庵　柴門ふてうる水をとんてをく
松かけれたり袖のうつりか　ことにいはれは孤雲の無葉つ
昔の様かけて月ハ孤なまり　柏露の世にはなれて絶人　長
無乃さりしふ月ハ高まなり　柏ふれる浪そしりき無葉つ
世の昔後道りんとそ出家し　隠居とそる無葉ハ仏法
乃縁なるれハ門出てそこの儀なり
僧達く常とハきのね無葉ハ　志か海のうちしめてた婦ん

○ よるとのよ
かりそけ世をいとふ吾ひと　後きはとよき衣の袖に
悩とあく雅り掃さん　秋はつる世に老てつゝき　哀そや　新古今
撫古見れ出もハうかりくり吾紙道よくあしけりひとまあく　直意　法師

千載
世の中よ道こそなけれ思ひ入山のおくにも鹿そなくなる　俊成　法親王
詞花集
山里ハものゝさひしき事こそあれ世のうきよりハすみよかりけり
千載
元ころそこりし昵しき昔の世よりハうちさらはうあ　嘉之
古文真宝　衆人皆酔我獨醒リ上有鷹下ハ狼ひ
とりさめかたくさり
諸経論ニ三已ル世とヨメリ

一 よの様
花に世の花とふやむらの牧
よのつねの哀れもおもしろき事のはへ世に出来ぬるへき世の事　日
後拾遺
よのつねに思ふ別の旅ならハ心見えなる世の事や　長能
千載
世をハ住そかれやすからんよのつねならぬ物のかなし　忠信
源氏
よのつねの塩焼くりし月に花ありしせんれ儘にわれてかんよ　御

一 よゆきり
（千五百）
弱小車をやしきさうる逢 秋よゆうてあるてあの契もし 月
一 よせきりき くしみする紀念也 ともあるんなすくあり
右大臣の家の歌合にそよせたりけると源氏の有
一 よと記
（壬生）
秋あうしよりひの秋よふ記 かくふて月のまろむし毛
（日）
名ろく葛く向ふ町のかしく 名すかり文字によりひを恋
山もの住身のいけともあらん 納まろいぬ出とりし秋よ
（千五百）
よりひの猶よりれそされ 色てよりむしふう陸わや紅
（風雅）
沢人のよりひきしさうる三日月のかしかる川の行水 准補
（新古今）
秋よるひおとろへゆけとさらさらの袖にかれしも思ふとそ
（拾遺）
吉野乃やまやまもえんり此山やまよりそさこうひある人 元輔
一 ようろ
（庭桜）
夜霞とつな月のさふけさ 嵐のさ通ふようろ絞も向く
（千五百）
ようろかくやも鳴あり春 まさまをりうる深さ落村
昨日より風さへうつ年経て 入さえ続のうすし明あの
けふれ立母んつようくゆよ過ま 引海てよくそよ年中
（月清）
吉野も山瀧のあ上氷ろしと朝より ゆくくつてもるこの声
（三条）
秋深うれよろちしの心のさうしや秋そても軒やうれん笛 西行
日つよろえもや落るくうらまさの旅
一 よもこさうふ

なくさりくもとかとらあつらう　ともきすかの宿ハ月さえ位俊て

金葉
鳥乃音も花のにほひも春なりし　なにあ暮ぬとさよふの宿

大和物語
いつこにか菅をも宿と鶯の人にまかくや誰とらしらん　宿

日
人乃秋にあさ人音もくみかたく逢ひてはまた屋とやハ

六義
八重葎さし籠もりし蓬生にいかゝ秋乃くるらきつらん　これ　俊成

ま木
思ひあらん中くゆつし指行よせかひ茂なら蓬生

源氏
ふるさとにそのなつかしと道もなくふかき蓬のもとの心を

月清集
蓬生の末葉乃露に消えつりなけ世すと侍らんもののハ

蓬生みとふりにたかけりしとよもきふと云事あ哉

乃無末摘花と有しひとらの宮に住給ありしよしく

ひらひらに訪行てしを雨の流も当ひよ思ほえ行かよ

蓉ちらさとのうら人乃住ゐかたしよみる紀家とよう世語ハ

御傍の人皇あむひとち嵯峨院御宇ハ中めり侍よ

立と思ふく方へも行ぬよ五月雨に昨日まてる露すら　さくを

みちもかけ草ハむらむそとらひよ人紛ひ後よ　二条院

乃別んしのたいかさつちしきよふ

○よもき

史本
袖ぬれて蓬か露もしらにあへて葉乃玉とねさ初かる　堀川院　土御

日
萬代を契りてうゑし蓬を花人の花をねくとらうつれ

比由首割荷仲実朝臣云是より蓬生ん心

なんさしるなしるもなあ念く國に蓬の人志

かららお祝ひてつ秋来く戸よおそく松の緑こる葉

とあとく云り

秋建五草
我宿に雪をいくへも重ねらん蓬かもとの蓬をもかな　定家

月清
けふよりはとやかくに（?）…秋風ぞふく

○よしのゝ雨

新古今
霞（?）遠乃芦（?）の…雨…霜乃…の影　家隆

よしなむ乃ほとり

よしそとしもしらぬ月影…　雅具

○

一　よしあしき

万
住吉の岸の里の野のよしあしを…山
ぞ也

一　よしわし　難波ノ浦ノヨシアシヲ吾申ノ善悪ニ云ナス

新撰
よしかたの…なれと…のこともみえ　資宣

夫木
けふのなかめの…濱荻…よしあしもこの浦人

新撰
花よりも

新千載
よしやたゞ今は難波の…行…と　正定

一　よしへやし

よしへやし浦はなくとも…
よしゑやし唯なるものゝ…こそあれ
万葉には吉恵哉と…
いふ心…よしへやとも有

一（?）
万
よしやとも…
日
我せこが…

一 よるひ
おほ雨の光をおりし人ハよく君にちかくくたり
日本記に云豊玉姫そのみことのさうくしき事を
字称ほく哀しそ父なりやしなりんせむしける
よかしやせ給ひしくたとの玉依姫と名りて
養をせ給ふ時なり豊玉姫妹玉依姫よ
よせしく譲給へて龍宮の也へおちし雨とは子なり
さとし玉なりし也とのかめ也兄とはいろへとよみ謂なとに
いろはとよりて又云此尊人となりて後叔母の玉依
姫を妃とし生給ふ神武天皇也又彦波瀲鸕
鷀草葺不合尊とよりし此尊を産給ふ屋を鵜
鷀の羽としてふきけり是の縁にて産屋をとりとよりとふり
但産屋に鵜の羽をしけやとつかたへし

一 よふそ 金扇
東山 思ひときの身をしはり欲よ扇よのこひとひ老とこそりて 貫之
凡雅 金扇よそいに花の使とかんへ面よんの肉よん角よるの須
后秋遠 よ扇たかりし雲のよそ見る時も秋の月よのおもひすゝみ 源道済
胡蝶 花くそ見も中にきりしも流の人の風にうつしあはれ 忠良
月清 都の人の霧の扇よ詠るんと白かんらしかれおの声や 雲
新後京 山深み見し雲の扇よみんて誰詠るん又秋の月 契成
子義 卯の花乃よ流の成りゝ山里の垣根そりゝ白雪 好年
玉葉 九重も花の盛よ如くす海よ秋の月とつや声のは扇なり 清慎

一 よるも
風よかし宮とも桜のまかは 栢

一 四方の海の松もうらやむ難波杣

四方ふかんよこえの松の朝ゐ頓

朝霞こゝろみと四方の宮こ哉 救

んかうりまうひさしう宮こ地を もみちの文字よりも分ちて

淡京拉
柊政

五十そうた合
昔より三國つたふる法のみちひろくもあまる四方の宮ひ哉

源道信

題しらず
たゝめやう四方の山々に咲花の白ひも霞む二月のそら

皇后宮

千載
春雨ハ四方の草木をわかねともしけき恵ハ君か御代かな

入道大政大臣

月清
四方の浦洞一つに澄月のかけもわかれぬ君か御代の郷

朝日さけ四方にかくれて霞むなり 高國

一 よろつよ

後徳
よろつよをかん風も吹河の波の上にいくよりうつる紀の月と

新拾遺
四海すみかゝるきこえの道ひ出ぬ音羽まてまつりの浦波

法皇御製

一 よろつのかみ

神代のかみの神代とかはらぬ君の代々ぞ巴

一 よしの

拾遺前
花ならぬ越路の雪や吉野山

神中
皆人のたつ吉野の山の桜がりちるやうに咲のきみのよ

源重清

吹風のよしのゝおくの呼子鳥深くも頼やたつねん

法印幸清

大峯にこそわけひろけもなくの花の袖かな

まま
備よしに衣世見ハ山さくら花より先にちるらん 行秀

日
三吉野の高根のさくら散りにけり嵐も白き春のあけほの 太上天皇

拾遺
春立と云ばかりにや三吉野の山もかすみて今朝ハ見ゆらん 忠岑

日
我宿の梅にならひて三吉野の山乃雪をも花とこそ見れ 読人

新古今
時しもあれたのむの雁の別さへ花ちる比の吉野の里 源重之

是ハ武蔵野の吉野乃事と云り

日
みよしのの山乃秋風小夜更て古里寒く衣うつなり 雅経

日
昔誰かかる桜の花を植て吉野を春の山となしけん 摂政前太政

日
吉野川河ふなこえて御稲くだしゆふ花の都の...

後撰拾遺
古への代々の御幸の跡ふりて花の名高きみよしのの山 大納言資家

日
あさ夜ふかくやらでかんみよしのの吉野の川よ... 延喜

新拾遺
吉野山花立ころと雲かかりて花散るころの... 前大納言為家

風雅
流るる吉野の山より雪さめて... 前大納言為之

日
春又世乃中に吉野の花は春流風月あかぬ花の月 蓮法

新拾遺
古へにありけるぞや吉野の山の... 津守国量

後古今
跡ふりて又やあひみん吉野山... 法親

神中抄云唐乃吉野の山と云。從大和行りゝ
吉野と云山ハなし。唐ニ吉野山在て。吉按ニ云第手
二年ニ真宗禅師遊芳野。今峯山神遊云古老
相傳云昔漢土有今峯山剛藏王菩薩住之
彼山飛移海上來。彼山ニ蔵王権現ト號ス是ハ
唐吉野トハ不可云。本白天竺佛生國從此ニ飛来
ニ。是天竺ノ支ニ于唐ノ芳野有金剛臭儀按ニ
云 李部王之記云吉野ハ五臺山六郡リ山影如く

節ニテリしニ而不正

古今
唐乃吉野乃山よ籠るともをくれんと思ふ我ならなくに　左大臣
大和國ニコソあれ此ハ吉野山唐ニ有ナカれ
と籠らんと隠りし我をおもふらんといふ心也

万葉集
三輪乃山佇ゝ待見むとし年ふとも尋ぬる人もあらじと思へは　千々手君

○よしのゝ滝

吉野川滝つ瀬の風吉さえて岩ともなし水にあらき波　民

古今
見よしのゝ吉野の滝よりうかひ出るあわをか玉のきゆと見つらん　友則

日
誰為ふ引てさらせる布なれや世をへてみれと取人もなき　法師

玉葉
ゆふされはつ林のをちに見ゆる三吉野の滝つ河より流れ稼ぐ　読人

雲もこ花よりつれゝみよしのゝ玉松かえんかの白露　家隆

拾遺
み渡せは雲吉野山哉せつれる雪にかゝらん　源昌明

みよし野の谷吉野里花をくれはまつをれむる鶯乃こゑ　宗政

○よしの川

河鳥の花まさ絶しほし

古今
吉野河岩きる浪を神よそ

吉野川岸の山吹ふく風に底のかけさへうつろひにけり　貫之

吉野川滝津岩根の藤乃花ちりてゆくらん波やかくらん

吉野川花の音して流るめり霞のうちの風もとろよ

吉野河岩戸浦を越て千浪のときはかさそ流る　君代

吉野河よしや人こそつらからめやくいひてしことはわすれし

吉野河桜咲しく吉風よ雲けのあるてよ生ゆく

よしのゝ山ゝ花とけ

○

○みよしのゝ吉野の嶽にかゝる八雲はにほふよこ雲かも

一 よこ山

妹と姑おひみつしの中山の杣横山乃一のしるしと思へる

一 よことをり

まま かひかねをさやにもみまほしけれなく横ほりふせるさやの中山

かひかねハ雲のかゝらぬ時もなく 古今連歌に在し

甲斐の国の奥の山々果てゝ駿河国よりハよくみえ

侍とも、さやの山中にかくれハさやの中山にかくれて

みえねともさやかにみえしとハさやかにみえし事ゝら

なくハこゝろかはるとかくとよりハ甲斐ハ宮部と云

侍るなり

一 よかは

山ハよ川の名もきるき寺 秋乃きよきや霧立乃秋の月

新古今 かくしわたりぬるえの山雲 水くむる横川の月やきよむらん

新古今 都よりいり雲の八重よろ奥山乃よ川の水ハいかにかなりけん

新千載 風にゆく川乃杉の下流よ人のわたらしなる 前大僧正

新続古今 思ひ出る雲井の月乃影さへ横川乃水かとすめる 真弥上人

一 よこきる雨

塩かれてかれたる風さへてよこ地降入る横きる雨の秋の辰 日

一 よふこ鳥

新続古今 身をも恨てやひとりなくらん 呼子鳥よふそ鳴なる 家隆

をちこちのたつきもしらぬ山中におほつかなくもよふことりかな

よふこ鳥浮世の人を後の世の深山思ひ唯仏道 慈鎮

みちのくのちかの濱なるよふこ鳥なく聲きけハうらやまし
よふことりハ素白なるとりなり

一 よふ子
呼続の濱千鳥や聲ハ海女也

年中行事
よふねの春風幾世歳の声 碩
雲の上たりや見えかへるとよふねかし年のはしめの万代のこゑ 前大納言
舟よりよふね川ともに日ハ音ある夜中さへ川に浮鳴の聲

一 よした
拾遺
名にしおはゞ吉田の里の枝なれば流てもよし千代の萬代 兼盛

一 よろひ
是やよろひの糸なりて 卯花乃垣ねの花咲きよ

一 よめとり
三十首
よめとりをたのむの雁も鳴なるに秋の田乃守人 定家
おしなへの袖のまよひ兼島乃ちりとちりにけり

一 よひくさ
花鳥
秋の七草 是ハ 萱也
よひくさ草よふつくし川への夕暮かけの錦乃月出にけり

一 よしろ草 夜白草 是ハ大豆也
花鳥
春の田に雲てらかんてよ夜白草仮令のすも花の夕暮
天智天皇
花鳥注
名

一 よもぎ文り志國

一 唐の名よりもまさる詠出て　蓬か嶋りいつく都し　ろさ

月清集

なに紀見は衣手ゆかけの絶ん碩よりも紀の嶋も思ひよすそ向　柏

雲かけ波の数とも浦時よ家く蓬か嶋の宿も見え

た

一 たま

拾遺

流しよりも浪乙抜は命なれ巴　たまる紀玉の光ありけると　月

まま

稲葉乃光ふりし女露を光し流玉とも思ひけるかな　急島

赤染山家

秋あこの玉乃落くる稲たまさに月日ハつつやさまる　西行

ちる花をとりてのわやめれねらけく葉玉とやいるへ絶ん

わつつし河錦乙久れ三代迄ハ石とて乙つきの家も面え　式絹

家集之跡

埋もれてくまなき紀玉乙カりの花業も作そつて秋なるさ　清輔

光なきやいらすみんりろもしの豊玉和とそへしと月け

一 月と夜うへ乙紀玉の日うれ　圭

まま

年をへて濁しへまわさむによりも玉ハくつりて磯やとも命

唐舟葛浦とい貝の玉れ萬浦乙い貝れ玉んてさ

名れハ國の名なりける時ハ雲こそすめ志の濃き夜
雲くもる秘こそ玉ハくもりて住さりハ住へまじきなり

一 たまもとつま

露涙し風猶玉とちられ 旅
玉簾海こそ外山のあらしそ 長 風のひまひく花ぞ散くる 雅
金葉 養ふけるをかしの玉ちられ 小車と花の玉簾ゆかしかな
大和物語 玉簾内外まくらハいとしくあけとかきしく折り戯り
友洪 志いよりも我身こそ消えき玉章まれの水ハ恋しとありやハ 読人
たまきはる命の緒さへ尽くとも人こそかけてかへるを月かけて 月
玉ぼこの道のみ中の海よりも吹風のさむさハ流くいかなる月 ひと

一 たゆゆら

西行 玉ゆらも見るをたのむ葉の袖 碩
西行 玉ゆら涙む夜もやるかん雪 めぐりて此全夜とゞまる 杜
為家 蓮葉乃上にと結ぶのかきりまて 秋ちるや玉ゆらと夕立乃西月
曽丹百首 あさくわしく山田乃早苗取田子の玉ゆらもしるしを降ちる 経信
あきさしく玉ゆらとやまの水際ゆ見えぬる浅瀬の面 き 玉 千載

一
月清 秋の田の穂に編葉乃露ちらぬ玉ゆらこそ仮寝さひしき山陰の 千
玉ゆらの袖の露もとどめすあなたに人こそかゝる庵のおさき 定家
はゝそ原乃青葉から秋なる風にまかれハ うせ

一 たまにえて

是やまたふるき玉ちる忘草の露 牧

佗ぬれハ今はた同し難波なる鶯宿る梅ならて青柳　月
春よりも猶いとはやく見えけりたをやかにみえ玉　枝

一 玉江の沼
千載
みこもりに蘆の若葉やもえぬらん玉江乃あさる春駒　藤原清輔

○ 玉江ハ　越中
新古今
夏苅乃蘆の假寝もあはれなり玉江乃月のあけかたの空　俊成

新勅撰
三しま江や玉江乃まこものひとくよ秋風ちかくゆくほたるかな　親王

後拾遺
夏刈乃玉江の芦をふみしたきむれゐる鳥のたつ空そなき　源重之

新古今
難波江の芦のかりねやよそにして玉江の芦の假寝ならハ　但馬

玉葉
玉江乃まかせにしたかふ芦乃末葉も秋にいふかせそふ　前相國

一 玉柳
拾遺
鶯の糸によるてふ玉柳吹なみたりそ春の山風　法人
風雅
春の日もくれなゐにほふ梅乃にほひの玉柳　右大臣
鶯乃来ゐるとも玉柳吹みたりそ春乃山風

一 たまかしハ
名にしおふ清見の玉柏　祇
月さへも夕立ちかし玉柏　牧
千載
難波江の藻にうつもるる玉柏あらはれてたに人をこひはや
新中
みしまやなかにたつ玉柏船にかくれてふかくもあるか　

初中
假ゟこの里の八重の散るしへそこと斗の句は身に遠 日
此鞠しと詠む身には我ありし哉
然るに花を家し八と云事は非伐に單に出候よ
とて此哉有勝へき也しと此たるしへのとき花
と御覧ありて満候ひたれハ存候ての事也
並くわり候りて取ら為被鞠抱とて云 菅野
一 川為とかりましてあるに遠為有り
一 影添し月や八重の鞠箱 也

一 たまの遊り
椿ある八千代乃花の鞠流しに紀録
一 光ゟ上霜や八千代の鞠信
信も花候らされたり鞠椿 依
菊隠有り咲や衣乃鞠つり紀 也
一 霧沈秘蔵の白き鞠信
月信 色字ハ松白鞠流きとうひまたり家秘乃霜乃宝ゟ気
月読む明し光為りた程
是大 老ゟ為た盤乃山の鞠信いりひてられらるる卯挾り 備親
信ゟ我 興ても年乃とある紀鞠信信ゟや千代乃枝の鞠哉 五法門 阿
枝流 君ゟ代を浪を有らして雨つりき三度ムハわらたさ何とも
徳是供長椿鞠尋汲下云文ノ心ナリ 眞儀抜く

天竺ニ白濮ト云所様ノ名所ナリ此様ニシテやこしの高ハ
八千歳ヲフルト云リ神社ニ世ヲ祝シテ御様云リ
白濱トヨリ白玉ト云ナリ玉のをハツヒナリハてハヽト云
〈ヘ〉

一 大滝さゝ

玉笹のうへにはかくるゝ露霜の
(玄隆) 猶たのもしき行風の雲やまよへる
涼しく玉やしかれは思の玉ぞ見し表の八千代乃末のこゝろ級
積る露ハいやくゆかしわかさひたる八重さす思乃玉藤の上

一 たまくら

(玄隆) 老の御やまの影ぞみ玉藤の体

松ノ…

(古歌) 親子のちぎりいつ絶し　夕良乃月の露にぬれつゝ
(月詣) 余所にてもまれ其て松村に玉椿かくる紀山の玉の所乃まに毛
玉葛絶てし後はしものは乃のまにまにあけてちからん
(伊勢物語) 人の後の世やも見玉椿の雨敷りけのこゝろんしらちら
(日) 谷をわかん露けても人数あるものと人ぞ我身のかよ
(毎日) 玉椿露の流しく大石山ま枝の縁にかゝるもの夕からん　家隆
(続古今) 乙女子の申の神山乃玉かつら今日のかざしとうちやまん　家隆
(金葉) 夕露の玉ろしく女郎花なびく秋乃風にそよぐ乃か
(まま) 玉ろしつきなまつに成れば緑わかの嬪けさる
(拾遺愚草) 涼しく柳の糸の玉ろしてめぐりさつる窓の橘よ　定家
(拾遺) 玉ろしつたえぬ緒のしもと新玉の年の日のへ吹一衣のこ　為忠

一たそかれ

戀しさの身はなかれとてや玉鉾の道にまよへる　夕顔巻　巻上

此うたは源氏の物語り中将の夕顔の上の句

かつら絵るそしことをいふは此夕顔のところに出来る

頭中将の卯にしたがひにゆき中将の少将なりしとき

事源氏のひかりし絵にかきて夕顔に給ひて見むとも

うちまかせの宿りにて夕顔とかや又の名の住給ひ

給ふに源氏六条の御息所へかよひ給ふ比惟光母

乳母ひとつの給ふ中つかきのみると

此車とゞめし時五条の小家の中に夕顔の記

されば此のうたはかはらけにかきて扇のはしに

かかりけり女房ともみなあわれしやうにはべるのみ

花おりてさしいだせよとの給ふ時かはらけの扇

の作さしたりしうたに此花をとかくいひけれ

源氏此花は何の花ぞとたまふ時夕顔と申花の上

こなたへ翁おもてにてうちわらひて乃しかれば先に

惟光にやりて御車とゞめて乗出る

なる夜への給ふ六条川原院へ

検子ともの知らぬ右近といふ女房一人めしつれ

源氏同車ありて川原院へうつりたまひて一夜ありけ

るに物の本にも此夜五条の夕顔の家に

物をたがひし俤まさに夕顔の六条の

此姫君をいへるなりけりかなし　長恨めでたき書

太宰小貳母成ゝれハ此姫君をつれてつくしへ下り給ふ
くるしみなから筑て小貳なりしさ程つきしかハ都へ上り
給ハんとせしに此姫君をすくはなからへ給ふへきにゆゑ
ありて大中将殿へもかくれてかくて書かせ給ひ
あまた成けんのしくも小貳とて肥前国乃松浦なと
にてのかくれとをかけられて後家集めせと云
武士のもの内大夫監けんと云ものと合せんとせしと也
とかく〳〵たとへハ小貳か妻ちゐ子共と后にして逃
くれハ我身よりのかけのひとつよりかかり九条に宿と
かりて男山へまうてゝいの八幡詣て初瀬へまいり
給ハんとてかりそれより初瀬へまかりて右近にあひて此君を
一度さんこの所より初瀬へまゐりこもりたまひしにゆきあひ給ふ
都へのほり源氏へかくしゝを六条院乃西の町乃
内より垂給ひし事とめにとりされひきつらとむ二条紹
泥子なんともこゝに出来て盤思し給ふと也その後ニ本親
中将よりまことに給ふと也

一
たまつさ
玉葛に白ふや羽風秋の鷹　柏
懸りされハ侍もうし　契りさへや落葉玉葛よ
藤乃丹の多結文字あつ含れ　是ふまゝ乃露の玉つた
手を踏て後れて鉤乃玉つさ垂　くさへ流し寄浪よくそされ　く　碩
まゝ木　流れつゝ玉葛の文字のくまりて埋の乃含　定信
手つ　別てハ形見成りし玉葛ゆきうりかなさるとを流て　久家内大下
思ひきらんの乃んゆり玉葛の主にゆて立へ仏の花　昭

玉葉
玉札乃その玉札緒の絶ずしもとは所詮人の語をそなりき　御製

御返事

月
古へより語る玉章は所見のつゐ思ひ寄絶えて無き

世の中をさそ絶果てやがて吹くさへ見えて花もなし

露も風の吹みだしける御見なり

永福門院

○かく語つまさるしるき

玉章は語る書がくもんゆゑにさひあまく旅つゝゆゑ今

世中にありかりける鳥羽りかきくなるありや消さし

綺語抄云盤達天皇乃御時自高麗國勝状ヲ鳥

羽ニ書テ渡シタリ是を讀へき様なかりけるを

ありしの王辰子と申人此鳥羽をとりてよみし

高きのさきあるようへとりて讀しける名門

御くんありく國と申しき渡信かれハ伊豆

國と申しキ渡トて名をハ王辰と云り今ノ伊豆

權現是ナリトニ依之此山のほつりハ辰の日を

まつる例也すてと云枝人の名船史祖王と云り是

○
美名ナリ王仮条ナリ又船史王トモイヘル
シチノハシカキ是又綂者一ニハ清和ノ御時藤原恩養
ト云人日氏永平ノ大臣ノ娘ヲ恋テかよひけれと
有けるをあはさりけれハ女心ミんと思ひて堂
有きて拵云かゝる所ニ榻をたてゝ是によふきける て
百夜外かん時ニハあわん事さハんと云けれハ
杉ところ榻ともに年來くりとて雨風をもしらすかよひけれハ
とひきくくその志ちのよよりしるしのよとわう
秋乃稍をかひつけゝるか九十九夜ニ成にけり
之秋かゝりをも何かをえぬ事ありて行かて云
ときゝてよろしく暮よかしと思ひけるまに親候よ
死シテ遂ニハ不逢ナリテトニハリニケリト云ヽ暁
榻ノハシカキ百夜カキ君カコヌ夜ハ我ソ数カク
一
又云一ツニハシチハシカ事ナリシキナリ鴫ハ暁ニ羽ヲ
カク者ノコト鳥ヨリモシゲク叓ユレハモヽハカキトハ
読又鴫の羽かきもゝはかきとそ云鴫ノ羽遠くもう
唐乃鴫の羽かきもゝはかき我思ひ人乃きぬさらぬそ
漢武帝ノ王子鴫ヲ云ト云人ハ左右ノ肩ニ翅アリケリ羽
鴫ノ羽之如人ツハサヲ以テ数千里飛徒ケリ其名死 充
トテ我左右ノ翅ヲキリテ我子ノ鴫ノ相墓ニ埋給
彼羽ヲ家ノ守トス鴫多ヒ人ノ家ニ有漢ノ仁帝
宮波相墓ノ妻ト成テ金石ヨリ通ヒケルニ有時ニ
暁来リケルニ鴫羽ヲ運テ恨ノコトクニテエイラ
スミテ帰リ水ツノ心ト云ヽ又云光仁天皇ノ流時ノ御殿ノ

中納言ト云人ヘツカフマツル女ヲ思テ通ケルカ、ナヤカ、ねのひ
くもゐのかよひちもたえぬれハ箱のうけこ
ろり鴫のこゑにとりあはせて男にとらせて是ヲ知
テかへつ紀母ニ来テ家ノ窓ニ数ヲ射百ニ及
セシ時ニアハントト云ケレハ百ニ満んとしける夜ノ百
夜羽ヲ失ス百ニ満んとする夜男カキヌルヨシニテ
行テアハントスルニサラスハ今ハツノ羽ヲ矢トテ云矢テナシ
ト答ケレハ羽ハ鴫ノ羽ヲ大切ニ思ハ子ハコソ羽ヲモ矢矧
トテアハストナリ又暁ノ鴫ノ羽垣ハかきのむまなれて
毛只暁ノ事ニ多ノ説アリ

一 たゆとき
あか月のしきのはねかき 忠

歌羽
志のかのはしのとれの玉の緒 定伊
まよ
色ことき初子の風に乱るゝ志のかのこやし 俊成
月 万葉
初春の初子の今日の玉はゝき手に取るからにゆらく玉の緒 家持
月
玉ゆらきこそのこゑをよむへしと玉は根にかへる霞の 月

中川のしきなそ子日
仲実朝臣
さる
ゆらくよみ
日 うちなるなく家なき 中納言家
日 玉はこそ
[illegible]

一 たまのこえ
玉葉
影ゆくもこのまよりくる雲のうへを玉はゝきとはいふなるらん 上東門院
一 喚鳥数ある花の別ゆくをはしるへしと
き 長家

一 たまほこ

玉鉾乃氷や月の影ならん　拾

玉鉾の朗をわすれし春雲　雪梅

東山殿　なくれしせめ玉鉾の道　別とて玉鉾も絶ぬへし　長

春夕　誰か里に咲て花の白露見　遠く迷ふまむかしのみち也

玉葉　玉鉾は花もちりまかふ暮にもそのまゝ御製　後京極

玉鉾乃道のおもひ妹とをひとつかな　枚上高女

風雅　たまほこの道の流代あり雲居昔の跡のあし　法印道懐

新後撰　玉ぼこの道ある御代の佐山あけてみよ　教長

続拾遺　たまほこや道ある道も川とみん定家の　定家

同　人皆の玉鉾の道ありける山の井　太上法皇

同　玉ぼこの道の神の白玉よりも見え玉の数

玉鉾の道にしてなき田舎也

一 たまも　藻実成　亦女ヲ云也

氷るまよ玉藻かるまかの海　養

恨めしや浦漕玉藻をとりてかへりなむ　内大臣

住吉は浦乃玉藻をよひあけて浦の松乃陰をたのまん　清原元輔

○ たまもの刈藻

○ 神中抄　字かなき芦原のおもひの藻や又千尋の海の玉藻刈

此藻のくさ字あけて玉藻刈今日もかされ

今日よいかしかや玉藻刈しあり

住吉の松の浦の濱邊より弥こえて玉拾ふらくたえましき

此歌ハ一くりんしたる一字也

○ 玉かしは

新拾遺

太山より八汐満の玉かしは　牧

ぬきとめぬ玉にも似たる山の苔上より紀の海の玉かしはかなくかり　仲実

三山ちか夕こえてにれ推せん乃ことつゝみの玉霰かな

一 たまたれ乃紀

新古 拾遺

神かきも浜通れ乃葉さりとてハたまたうときやうくつ　信実

新六三条

ゆふしもおくの秋ハつりゆふ白よ露そくれんこをし　

新六三条

機の女のあさそておもとその玉すゝ紀の夕のあたちかけ　内家

古今

おもくなしても思ひすもゝやり玄果ねて抱きりの玉すすきかな

此哥ハ當時ハ佳あらしと思ひすれハ玉をさし人かゝれの花

絶当ろくあやまそをやまたは玉うらもあかれのしのうち

かゝ々あるとこ

一 たま滴つゝ

葛乃かさの玉葉吹乃御乃凡　体

東記 玉乃を葛とりもかりつく　吧

指吟 浅かにつゝ奥乃松か枝　吹もまり　月影の高に添ゆ風の吹巴

まき 秋さけ玉葉葛を小風吹てらうみを出すゆゝかりの林　日

新拾 焼もそく古世のとの玉よ葛玉滴くにうけ成にそ紀に　定家

拾遺 浅茅原玉も葛かれ乃海風のうち出しかり秋の身なりけり　為家

一 しら風くらしま

夫木
玉くしけ二上山のあけほのにやけあかしまてもめくるらん 源兼忠 朝臣

風雅
名のつくる秋ゆふけく御山乃玉くしけのふたこの白雲 内家

玉くしけ吾身をはしいかに月の一宿 頼

一 たましまの里 山城

新古今
袖乃上は玉ちる涙井手の里 柏

玉川のさとや月をもめくるかけ [illegible]

見わたせは波のしからみかけてけり卯花さける玉川の里 [illegible]

続古今
玉川の岸の款冬信夫えぬく色なる波にみよるなかり 後鳥羽院

玉葉
さえかへりそのした草もめくりわかきうまて玉川の 俊成

日のみなよみかくる日ころ長宗まもとめる玉川の水 [illegible]

新拾遺
てらくりやけらす浪際のかけをうつしにさくあれ玉川の
深くたのむ人やなからん夏草は露みよ浪も井手の玉水 伊平

○ たま川

新拾遺 秋近
数見つる乃花山吹波も見なりよむかひゆくる井手の玉川 日光院 入道前関白

五月雨ハ夕しほなからみちのくの野田の玉川わたりせぬ 源

新古今
夕されは汐風こしてみちのくの野田の玉川千鳥なくなり 能因

○ 玉川 摂津ニ有

今案
卯花のさかぬ垣根ハなけれとも名になかれたる玉川の里

○ 玉川 武蔵ニ有

拾遺
玉川にさらす調布さらさらに昔の人の恋しきやなそ 読人

新拾遺
何府乃さらん萩よ秋かんえて月をまつらん玉川 法仲 先

玉川 紀伊 此玉川ノ奥ニ毒虫有ト云伝ヘリ人ニ汲ませて

風雅
忘れても汲みやしつらん旅人の高野の奥の玉川の水 弘法

○玉川

玉かつら霊の雲こそ[illegible] 祇

古今
山深み人しらぬ松のさか[illegible]

一 ゝ河乃了忍

情なくそれのゝみの玉の声[illegible]とこしへ[illegible]抱の紀色[illegible]

一 大河乃花

歌約
わきて[illegible]の玉の小笹原 道昭

古今
しのゝ命[illegible]やよさ[illegible]玉の緒[illegible] 真観

日
逢事ハ玉の緒[illegible]吉野の川の[illegible] 読人不知

日
[illegible]かけて[illegible]玉の[illegible]

伊勢物語
[illegible]玉の緒[illegible]

五十首歌
[illegible] 家隆

中[illegible]葉[illegible]

葉子ハ[illegible]周乃文王の時[illegible]姫[illegible]

[illegible]乃[illegible]姫[illegible]て酒[illegible]

[illegible]門[illegible]

[illegible]の[illegible]

[illegible]姫君[illegible]乃西[illegible]皮姫君

[illegible]風[illegible]葉の

[illegible]葉[illegible]て後

[illegible]章[illegible]繹[illegible]織

[illegible]の[illegible]

似[illegible]下云

一 たましひ川 志留 紀伊

後京極
いくかへり和歌の浦風身にしめて家をしのはん玉津嶋姫　後京極摂政

続後拾遺
雪積るわかの松原ふりにけりいく代へぬらん玉津嶋もり　法皇御製

新古今
玉津嶋入江こえ出る冬毎にみしかひもなき我やもらし　藤原家隆

玉撰
玉津嶋深入江をこく毎にすゑこそ通ふ塩なれや　藤原雅経

一 新玉津嶋　山城

篠かふのくもゐ風寒くもの住かけしをくるぬかな　衣笠内大臣

一 たまの井川

続古今
春の雨やそゝくらん新清水玉の井川の水みえ見えて　家隆

風雅
玉の川や蔦かゝるものの川柳よりふりちる秋風そふく　宗尊

拾遺
ゆきゝえてもの玉の井川母あれのこたへんつらぬく寝ぬかな　家隆

万
春浦にすむ玉の井川よりあもつくしけれともうく豪の杜

日
玉鳴の井川の母に寝ぬともこの夜も岩の下みちのあかりをしるき

一 たまし祭り

ちよ経ん人枕ものも哉　たゝ一人の玉机に祭る日本紀　孫

白露の何かそ空清玉祭

後拾遺
あきさん人のくるとききもに君をそ計の住宿も玉あらの　和泉式部

日
かけたる神のうちに玉ありとしらてこそむかしこそや　少将

今日とてや日影の日低(?)つらん玉祭すふ今夜月の中より　前大納言

此所七夕くしの中その備後紀残姫にしも侍らふ
ともあれとゆかしの姫やたて日能く引うるゆかし

一 云野丁匠ゆえん侍る六持ト定津侍

仏弟子目連ノ母ノ夜雨ヲ見テ出しむしもや経
をよみし作しけんや玉祭かく作ん八番人よりゆふくの玉の
ほとけとも中京源氏物語にも玉殿なとしくらされ書社

色初よ侍るやあんあんの海つりせし事は侍らぬあふ
事あらしとなり其心人乃魂を洗ふ俄よく侍る事ヲ

一 たましゐ

天の音添来也須秋乃風　柏

鐘なやんで人うしろくちゑん　雨ところかえ情を声ある哉　まさ之

新続後　三ヶ日うけよってそ次まかせ　魂あかしふおもりに謹也

拾遺　侍よりて此仮霞の夏　たましゐや思ふ方にかかるらん

大和　たく人風の秋もうわるといふかしてそのかさきえにけりてあるらん

同　色しぬきおもしき事もかからむ弟此ぬかしるそ絶

玉葉　かせ雨しきき秋身にそへ為歌して洩久愛世つそふりあれ

後撰　魂を離西袖りしとくあ至く秩人の雨さらまあくる哉　大和

○たまむすひ

伊勢物語　思ひ余り出にし魂のあるならん夜ふかく見えは魂結ひせよ

川ッ　玉はみつぬしはたれともしらねとも結ひとゝめつ下かひのつま
人魂を見たる時のまし哉ひよ此哥三返誦吟
して下かひのつまをむすふへし也

一 たまきはる　霊剋ル　灵極ル

後拾遺　玉きはる命も志らぬ別れ路を待くる君を法花老ぬる哉　航件

かくその遠しうれへ玉きはる命も恋の外ハえにけくき

手極を遠定てまたの安保のきみゆりてもおとのまけ　人ん

玉きはる命まちてし哥松か枝ぬるにさかくて挑ありよ

ます鏡ういとあや玉きはる岩のうきた瀬のされるつき

是ハいつそうたるもおあくるうて死

玉鬘内乃大弐乃少弐かへくたりし舟にて乗りしさまにとち
此哥 玉極内裏ト云リ 荻巌極ナリ
影昭云 是極ハ寂後を云丸何の哥も命とよへ
強りハ哀をよく〳〵く強りや 又云物とよろしうく
玉此哥をよろうきこそうる丸 強り給ふ玉と云字を
玉ハ人合の玉極かもしる事也 又俊頼ノ抄ニ
黄帝ノ臣下宗未涿鹿ノ野ニテ射タル鹿
ノ眼ヲ毬打タルニニテ打交ヲ玉まりと云ウト
云儀有今極ナリ

一 たむけ

折ぬる霜もしらてや手向草 続

身ハかつもえよ手向くる袖 大坂や旅の月の朔郎

拾遺
手向にもとへ家ぬさ乃旅の杖神無月よハ田鶴なかりけり 大僧正深覚

新古今 又説を
白浪乃たつた川もえのを手向なる幾世すそかの年此へたりん 皇子

手向草ハ結つましくろさい此解や 松又ハ時なり

随花紅葉なとなり

八千草此名ハうつろふ雲に照ぬる松のさえを我や結えん 読人

是も古しぬなる月の哥也

新後拾遺
玉津嶋手向のいふ云家乃若葉もゆるかくにしやみるらん 教實

続後拾遺
神垣や花乃白ゆふかけし若葉の宮乃手向り 篤雄

一 たむけ山

松乃たての志へんやま手向秋の風 柏

玉葉
越てみん手向の山と今日越ていつまで人をたのまんとせんら　坂上
金葉
白雲へ入し麓(ふもと)はまだしゆかず手向の山は花や散らん　高安　明徳

一　手をかける
絹かしいあまや川音ご漆黒　硯
ゆ紀わひの顔や空井浴で漆墨　月
潤や滝り成たらるやまりうん　月

金なるのふかやとのけしき吹けて　星
新続後
人あまと秋を星のおふ夜かな
又袖ぬらす秋のたつ雲　七夕秋まことの根いそろ
月
今日幾夜舟にてまだもん　銀河わたせるる秋風よ
大和物語
袖をしほりかさてつりかと七夕のおのね刻りよひちふかる　
今日
七夕よと朝羽衣の露をとりみ手ならむおもとりてやとみ　青
拾遺
遠りしる月日紙七夕まふおふ衣の板と見なましろる　恵慶法師
月
いとしく妹寝さぬ袖と見てそのと衣よおふ七夕
新古今
雲の上にほしねの衣とうんわ生をいと川ふらる天の川浪
日
七夕の羽衣する手まかわる衣すくしまま秋風さらく　家隆
日
織姫のさわする舟の梶のさね幾秋まで露払はつさ　俊成
日
星相の年に一度渡し波てその川紅葉のさし流る秋風　正徹
月

まさ木
秋乃夜のあかぬ別を織女ハたてぬきにや結ひおくらん　まさ

七夕にかしつる糸乃露をそうけん影もしきをとみてやゝ　南
女ハ苦しうして七夕ハよふ幸ニ有女のまめなる事よ
ハ露並也　相ハかまの謂あものしきとなりの
おもく成たる人有　影をしこかんとや
思ふらんとや

日
二星ふる人有ハあらし七夕此久しき契り侍を忍ある
七月七日ハ星ふ人の下ハ對なきとて七夕乃
有徳りて年一度契りて来年を待年比
日ふりしな

七夕ハ別て嘆乃海あ雄さよふあしての川　浪　和泉式部

千義
七夕のきはしたる一夜秋風あまをその海中をみなもしん　大納言
よて乃海ハきつ流れし母天の川つりんや　うち　好忠

古着る母ハ七月上旬斎之海ハ織女下り水ニ
めくりて衣ハ着乃つ星乃男さりて
久まく天上ハ乃ちかん事をふる其妻ハ
あり子二人をさ此妻をえ誰をこ此子ニ乃むしろ
天津乙女成りて其かれハ此子父の物ハなる
る衣をとて母ハ母帰く天上乃あそそ
毎年七夕七日に此海ハよって水ニあへるを納と
神代
秋為也七夕ため乃その高り織白布ハとりてあへ
此事眞儀ともに紀者是ひとの書ニ此あり
ニ合家乃此尚資其本ニ義星乃妻とも
出中後ニ星ふる七日七夕書ともにハ義星結

一
妻ども詫べし十三夜かや

一 たまさか
東山方 草庵さへ花は老木に山桜
刈るも萩の旧枝の露散りけみし盛りのたそさ秋　玖
たまさかに又あらんそこ　慰めしは大家人に縁まうし
伊勢方 世さかの人待えふら花咲く　涼しさ濁と西やととさん
我がつつりりもえ見れ　致　あえとゝ人あやさて庵さの人
投松道 草庵さにあふまりも花七夕八日波る今やあろしと　見つ　七年
新古今 紀伊国や由良の湊より　松よたそら行ても夜あそ　春田
大和物語 常も海に田ふ人あらは和田の原　鶉わふわけて嵐と昔よ　大夫
日 田の草葉末り結ふして露の西くさて八ぬまの野
今も雨もさくる行れ阪の宿も八郎宇陀祭れ花盛りりたう　良近　道吉

一
其ふ
月清 月ふ梅香へ露あへ今花は遠ぬ　秋
新古今 梅おりふ秋しもあや云秋の月さらばて袖乃露よよそしらん
田の出露しかく月の露となりそしと思ひし中や鶴家ん　桜枚
新撰 露そちや八重くてるの葉の面ほと共しぬしむ散らん
まかとたつ田ねへや吉野山雲とはむれ今年もあらん　奔道　法師

一
ゐしよう　あわつりかき
梅花 寿あてしも山涙や幽くろまえ露　巴
入りとそへつゝ月りけさすみり　日　打蔵つ木のろとのいとう日

巣ちてしむろ子や鳴らん 孫 巣その里の中つけとし 長

一

夕闇ハ道にそしる月待ぐ人まつ也さるその雨まるみ来

空蝉のまてり小宮ハ同車にて行入行時の月かな

友撰

夜さして月の雨そう散ら菜の花ハうつ袖おもし人やまつ 波内作郁

今宮

言わとそ寝て山へても何とかまくとも海縁 羽ん 業平

友撰

雪と散行先の桜まつ言わく嵐よりしも花の下道 内氏

後ノ我

今上月なりぬとつく生ぬまつ雨とうくもとも山にまへつ家 孝法 法師

月

能の文花しとる伝よそる絶えまつ袖の顔ハ世とも 資氏

いくをむしつくも義して〔?〕絶ゆく盃ともまつ親の家 親重

きけて我身の何かと思ひつつれく其ともうちから結世ね 忠元

一

たつさかすた 傳已

うつきまたにハ世とのよまそるハ 牧乃かつら川のあたりの道 内

赤縄乃はかの世傳ほともう女房まつ世のうつる

たなひく世ひらのやくたらうくさしとわり

まつのかたもまつねかやうくきまとる

遠きをハうつさも志しまく山中にあまるるそうくも守ろまるへ

後古今

戊寄て法師説

草もあはれ乃入江のうみのたつきまて夜あさきまるや契ゆらん 前左大臣

一

あまりり

今宵の夜を思ふ前夜かな 巴

篠乃葉の音を夜の寝ハ 拍

浦傳ひ道つと時夜の夜ハ

水鏡のをを夜りわらん住家

菊ハ田を花ハ友もて寝す 祇

諸へ家使りかしやんさし　肩をかりて歸る里人　顕季

続千載
色ふかき深山隠れの紅葉をも嵐の風の便にそ見る

日
思ひやる都の方の秋風を便りにつけて出る月か那　親隆

月清
池水よ宿りし光使にて氷る月の影ふかりけり

一　くぬもふ

伊勢千句
身は捨る世わたる舟　長く今日迄浪かひかさふ　能

ちり千句
志めて垣みちわさみそさて　さそひくるやはしはらん

私弄の浦真清し思ひよ浪の出る気色の見ゆる　よ

漁舟まよへ浪ありてそよふ八さうの方をいかん面にかれ　良基

一　かのうたゝめかし嘆きの菊の梅　枝垣根の通よふさそめの雅日

一　きらみきを

山乃端やあかつきの雲の見えの月也

伊勢千句
西方へ林森の雲か富士をみる根　長きうしろもためのきし消　能

日
風小麗く宮の姫のみ見に浮く白波志ては我思ふ

新古今
白雲の麗く山の山桜つらなれ花とりてかし　定家

千載
山乃端ありあふひく雲や白波かく成しの姫の形見なら　前関白

玉葉
久かたの光にあかりひくうきさ雲はまよふの果を色ん　法師

河弥陀經常作天樂とんツ　小弁

続千載
笛の音に琴の志らし色の通へるなるやかの月の風や吹くに　俊頼

一　うちかえし

月清
須广乃浦藻塩の煙立こそ春ふむせぬおりひとつふ人のふき
伊勢物語
きのふこそ見しは立まひかへりふ花のちりやしと見し

一 寺ゆふ

新羽集
おとのきりさしおりしらぬゆふやあやゆふふんしまあや
源氏
ふるさとの行は縄のたゆきうち打ちまりや須广のうちなき
八雲
秋ふ桜このたゆふふり絶ねまた後もおぼえやはやさし
又萬は葉文大貳くしてむしとて立雨のくのみ

一 野山ひとへ廣ふ初めかれてありうつりかはりうこの色

千五百番
涼しきや麻ふ毎からぶ岩根 松風通ふ夕立乃あと
千首
ゆふへ麻や廣き池ふ 波乃上の立ちくる人乃雄志
海ふしあふへるの秋路まても清きしん月ぞ照さん

一 まち風る
千首
浪のひさかたもあふ秋さて 枝たまやもゆる岩の宮へ立住 日
五十首言文
萩の葉は末倍もひく秋風ふ なまもね露のへでかけ てうふ 家隆
みちのくれ立逢の声君の社あゆをひとかくる 弓 説 実方
思ひやけわくらの声らしてきなるあゆをしたらめ 女蔵人 右近

一 さくら井

伊勢物語
月よりもこよひのそらのさやけきは清見か関や波の上ならん

拾遺
よし文は花も咲て時雨もあつまり来ぬかたにのみ　日
香

東山手習
久方のあまてる秋のさくら井ちかひの月ぞいれ

伊勢物語
曇りなき月の影をしのびつゝ雪にたくひもなき春の夜さ
や

新古今
誰をかもしるかを松につけてあはれならむ　去

月
ちよよふ花ものひつけくさのゆかしさにまかせておもひあへぬ
ちる

月
月みれはいとゝ思ひそ増りゆく花のよすかのたくひならん　盛範

月
行末を思ふ時にかゝる浮世のさきに桜井をしる旅のふる
内親王

月清
さく井の花も法の友とはおもひはありとも白雲のかゝや

日
稲葉ふく田の風もうけてこのふもとに麻のもと　橘　清

日
いかならむけふの今日よりけふ部にはかゝる人の
かまや文根もとこそ河の川の岸の

一 たとへ

風雅
むかしたにまた見ぬ山の雲ふかみおもひなせは山川の　西行

西山とこそ其の哥合とて京中納言定家卿の判
かへしをよそにも思ひのうちにも思ひのうちにひとしく
むかしより此ときよりそはる雲ゆゑと
たちのほるけふりをまつにかけてなかるゝ判

風雅
山の端の月まつ空のかたにこそこれやいまの雲にかくれて　定家
はしり井もとよりの哥
ゐのこ山の月たえぬほど見よ

拾遺
ありあけのそらのかすみとともに我恋はきえんとやする　読人

拾遺
白露も夢もこの世もまほろしもたとへていへはひさしかりけり　和泉式部

続千載
さきのおほき月のさかりはるかなるよりこのまの月を見るかな　後鳥羽院

一 岩田乃をの

月清
山里は小野乃原の近けれハくもりなき秋乃月に我も出けり 兼澄

拾遺
いはたの松乃ちよのためしに文二人共(?)君か千代をそいのるまて 源順

新古今
岩田のをのゝ宮人のうへ花さく月にみつゝとも 法印

玉葉
柞原まさき花乃咲頃ハ我見たる人まれなる 秀

続千載
郭公鳴や大和のおほつかなきまて待るゝ神のまさの 為氏(?)

月清
さとのけしき依保の川せの霧さそひて汀のよるべ八ゑも鳴

一 さゝのくま

花の名の紙のもとより出たる山路哉 紙

一 岩手の音羽の室をとりしる 梵人(?)ときつる我まくら

文永
ゆくへのうき雲もたゝすむ山のはの月にかゝる 相模

ゆくへも今とふらむ人のよもすから山の端の月哉 ...

玉葉
我のみや世をうしと思ふ人もあれはこそ いつかたにてか思ひ出さむ

公忠
たのみつゝきこし人をまちわひてかはらぬ物と我をなさきぬ

またの山ふかく霧とおなしくさの山に出て行もの

さりくれハ女立さりて石かなうけりはゐ山を残

一 石上の山をいふ石をいふまた石卜云

一 あかゝ

続後
ありしよの文のあれ君か代の紙 今見る石乃まれなりし

岩つゝ花洞紙に晴るらん こゝろもいつら名をも云ての道

新古今
岩と見乃杜のゆふしてかけつゝ人のいのちもかれまつ 平兼文

東山千句
雨風もこゝろありなの花 散ぬるとも来よのよりしめ 紙

一 たくひ

さらぬたに物ハ思ひの深き夜をつたへ見ん世の中一声もさらに 人丸

難波人芦乃葉分やかきそへてさひしさまさる夕暮の空 俊成

かけ又さすさやロうしわかふひ待ていはるゝ夕くれの道の 信実

正木の葛はふ木の枝も出ぬらん村雨過てかさとりの山 西行

一 ゆくへ

山ふかくたつねて見んありけるよ秋の

桐乃葉も踏分かたく成にけり旅

赤さひや河原の…しあはせ 秋の月しつか布…をさゝ 日

月さえて風の迫門ゆ風吹て氷乃上にたゝむしら浪 西行

石走る…か…ぬとも…なれは…

一 たく

岩そゝく水よりも猶…の鶏の歌

花ハちる鶏松かえにてくらへなく 柏

昔思ふ花乃月ハ秋こそ見 閨乃戸さして秋風かとも 日

来れても たゝく宿のさひしさ 能 足乃葉もえ陰も様見…飽 河

山人乃波谷川の朝顔さそふ氷もうけしもとひ流て

雲よ外花ちらし月かけさ…人の声をそよく松風 大江宗秀

柏ニ緑戸ヲ那カ柴戸ヲ掩ニ聲々啼同五更鐘

一たまし

東山千句
立依し人も露かゝる袖くられ　雪　誰かゝぬ人松にさそはれ行く　去

古今
誰しかもとめて折つる春霞立隠すらん山のさくらを　貫之

玉集
誰しかも初音まつらん鶯の声も山ふかみよりいでゝ　定家

誰しかも春の色山のあけほのをふかくちらさりなゐん　御作

月清
行くゝも行くまたく思ふ古里に同し月をも誰と見るらん

○たむけまし

拾遺集
神かけたる梅の香をそきる　雅

日
数よりも夜のみの誰なれて花乃ゆかりもよは山風

一たく　焼

伊勢千句
そのかみや焼ぬるかりの煙　長　旅めしてまかりかねりて　政
足曳乃山下水にわけ入りてのひまやうけ衣かつらん

未木
霧立の処末ハこえし春山の梅のにほひをたきものせん　仲正

一たきゞ

御とんの霜ハかんてたり　薪にゆる山上の風色の一松　隆西上人

千載
薪つきし煙もすみてさりぬる君や後の世もかけしとそ思ふ　上之衛

拾遺
山人乃これる薪ハ君か為おほくの年をつまんとそ思ふ　能宣

玉葉
年代数ゆきもおりおりことに積もりてかくらんといふらん　御製

雪の上の冬の木くさへ三乃京して

源氏
おしかへし思ひ乃花もこそ薪つきなん事そ悲しき

ほたるの事の上

月
薪こる思ひのほかの後の世を法のたきゞにあふそ紀

一 　　
权擬
薪こるさ雪ふりたる鳥邊野ハ煙のすゑや此松はら　それ
奥儀抄ニ佛果縁にまで入滅ニ臨ム時薪尽ると云ふ
霧のたちやしハ沙羅林ト云仏入滅ノ時樹枯テ落ニ
似たれハなり
唯慣三山中焼二落葉一ヲ明朝ノ薪待ニ五更風一ヲ

一 たきもの
夕立ハ瀧波なかれ富ゟ遠
[illegible]
立やハ[illegible]たつの波たつに　牧　瀧ハかゝりあれハ霧乃瀧波母　牧

一
尭孝
山下のはなをくへよき庵
瀧波ハ又くれ絶を拯く
源氏湯試乃[illegible]大井へ[illegible]の
乃[illegible]大井ハ[illegible]の[illegible]山田[illegible]の[illegible]
[illegible]堂大覚寺[illegible]
殿のなをくもなきあと[illegible]

一 たき
山乃半にうき雲一節　瀧の糸ま水乃くる処　て
吉野も霧の嵐こゝろし　瀧津せの落葉にとまる　争
瀧のをとハ絶てくひさしくなりぬれと名こそ流て猶きこえ　けれ
大覚寺殿瀧乃付なり　待瀧のをとゝきこえて
久しき井斉来風のまゝ霧も晴る也
千載
秋は月の[illegible]さしもとみえ面白く布引の瀧　右大臣
家集
七夕の織なる布なれや見ゆる落の瀧の[illegible]　後成

夫木 初 六三
家あとハ猶ふりへ宇治し白川の瀧にあらまく瀧の白糸 隆人

○たきのいと

新後拾
かぎりなき亀の尾の山 君か代ハ瀧の白糸数しらく

千載
わかためにちるかとハかんさく 嵐の山より落る瀧の白たま 藤原長能

一 きよたき川

このめや瀧津はやの法の庭

拾玉集
嵐山の山下水の岩隠く瀧津はやせをさそふかせかな

日
思ひとくれ中の瀧の清水やながれとはかんとのかね

新古今
清川瀧津はやの流やき瀬をたのしけせく神なるらき 隆縁

一 たつた 大和国平郡 昔ハ赤土山ト云リ 北ノ

古老傳云 此處ニ雷神落テ不得昇 皮ヲ御童子ト成タリケルヲ農夫養テ子トス 日照リ田ニ水絶時ニ陳ノ里ハフラサシ共ニ農夫カ田ノ上ニ小夕立ヲ降 熟ス其後此童子夫ニ呼テ小龍トナリ天ニ昇 依之此作田立田ト云ケルヲ所ノ名ニモ常ニ成タリ

夫木
明めとそいつく龍田の山の鶯の声や夜への寝覚

○たつたやま

古今
花の散るや惜しき立田の山の鶯の声

千載
立田山松の村立なかりせは何處に残る緑ならまし 法輔

古今
誰かみん人ありと立田の山の初紅葉 家持

続千載
唐錦龍田の山の郭公しほれて鳴の初声 基俊

新後拾
立田山梢乃紅葉に秋暮てつまつ吹松に残りける通　後京極

○たつた川

古今
ちはやふる神代もきかす龍田川唐紅に水くゝるとは　業平

拾遺
卯花乃咲る盛は白波乃龍田の川の井せきとそみる　伊勢大輔

玉葉
いつしかと冬のけしきに龍田河紅葉とちませ薄氷かな　俊成

続千載
立田川汀の浪もうち流す三室の山乃五月雨の比　光明峯寺入道

続拾遺
神なひの三室の山に雲晴て立田川原にすめる月影　花亀

古今
立田川紅葉みたれてなかるめりわたらは錦中や絶なん
御門乃御哥とも云リイカン

千載
駒並ていさみにゆかん立田川白浪よする岸のわたりを　撞重

立田川紅葉ふとちつる薄氷にてこそ錦中やたえなと　家隆

秋風乃立田川岸の柳陰なひく浪の下草　西園寺

一 たつた姫

秋乃色は衣や思ふ立田姫　休

涼しさや卯の衣立田姫　栩

伊勢千句
秋乃志ら今はとさらに法　歌
心よや風も雨やする立田姫

千載
立田姫かさしの玉のをゝよはみ乱れにけりと見ゆる白露　清輔

神中
雲乃音に風の洞とや住まて八立田姫こそ秋を知らめ

月詣
龍田姫紀のちの山をそめてけり松乃外をは深くする秋

一 たつたのいち　大和名所

豊秋やおさめてし民の衣の市なる飛鳥の数も見えぬ也　明隆塩

風雅
鶯鳴の名よ我名ハ限れ声やいさ文志し和大和云哉　定家

夫木
夜の声や◯里をかけくらぬ夜も花の都は思ひの為　家持

拾遺
なの紀名乃かん夜の声とハさらけ尤併さ文へとこらも　柿本丸
あし

一 名所のこや古

能のこや古も住うそてもや　浦嶋か此国ありく帰るそ

一 たり

拾千句
うらひ乃法とや鱼風志てらん　巴
能乃かりかくも侍なり
能乃かり雲井ハ海をたらてそ　祇
安も法乃道うし入なり　助

口腊や雲井の龍も我為うしおりし人とえ見えなり称と

一 とふ　鶴

拾遺千句
うら出る名我白浪きんとく　川淋の田名鶴り明る我らし
て漆風ふけるれ浦うし岩の田名鶴もたくろも我く帰るらむ　宇
拾遺
芦田鶴の雲井をかけるらぬあくる世代へく浮くも海くわら　遠　赤人
拾遺
雲もくらぬ田名鶴も見よ見えよ我の去日ふくりり名さる男　そ

口腊や雲井れ我うし住田名鶴を四文人よハ見えしなり称と

唐うし絵出く令亡なり名鶴と絵らるるけ尤実の鶴と

見え寄現く夜下我しよ鶴実現見えしなり此古支よ

之右の寄め此我へも田名鶴る見えしなりけ古事た

我らうもたとれ申四文人うし見ええ夜ハ口腊とあり

とうのこ面　読る　是ヲ天馬ト云リ

百首
山高み見ん人もなき沢の辺のかけさへにほふ今そしりぬる　実清
夫木
十かへりの松の八千代をかさねても猶うつもれぬ名をやのこさん　読人
日
龍田川今もえそしらぬ紅葉をかさねて秋をおくらん

一　たうた　田歌
うたふ時ハ里の内さへ田うへ〔ゑ〕の歌也
田うへうたふ田子の歌曰
苗代の水の田子の早苗をとる田子の袖
くゞ
五月雨ににほひけりやたの田の苗のしげりたちぬらん今はあなたの里　寂
六百番
雪にはむすびける遠田の上野の原の冬ごもり　加賀守
夫木
に近きより門田の入りの秋は国の定めのしるし也　公実
夫木六帖
日わたりの沢の深田の霜のよに倍しうへ時の細道
五月雨に又苗代の水のたまりしより　土り
三百首
又苗代の田面の村雨の小坂にてたく
夫木
田草とる〔そ〕の男の入り江のしまの田の面に法師
日
今ハ又秋をまちし小山田の田のさかへの心ひく衣笠
夏ハ暗き沢の水のきよくれは田草とりつゝ田のほとり也

一　たのりのうり
秋や沢て秋と称む稲の体
新古今
今はとて頼むのまも打侘ぬる月夜の時かなしき　資親
日
見る人を称むの沢をさむるも今の風の秋の又これ　後京極摂政太臣
夫木
わたし田面の茅草をさけて世はうつの秋の谷の定家
百首ノ内
山ほとの行よりかくにふかくたのみ心の一のね
の吉野の秋のかりのひとつにて来るよりとなく　筋
八雲御抄云大和国武蔵国又秋は田の稲

すゝり吉野郡にして武蔵より聟てはゝめうつ
へし又云奥儀抄ニ女をよはひける父ハなほ人にて云
母なん此男にと思ひける極母ハあてなる道とかや
乃国の吉野の里に住けり田の面のかりハ田のかりと云也
之ハむかし通や武人乃状よ執とハ坊国乃ことの外に
よりに狩をしてむかし多致起ちたる人よ其首の
康とさしまる事をそ田のかりと侍るいん云々
日叔ハ鳴らめりとりに書設ニよやかりハかり
万葉集
坂あえくかの色乃田のもへかりねとてさりむ君ハ花也
田面乃あるかりてもめ民の信の稀をてくかけ
古作よりる乃歌をしらり入て侍也

亦自一条ノ摂政集ニ大敷御門殿の任女に通也
けるへ書給ひそ家此あるともこゝ成に
雲井まも書やまりきさ招なる八杖む乃届もともらん
返事
云伝の歌しらしかめつし紀そのむの届にまし
此事も田のかりかえたり云名抄奥儀抄等ニ
曲儀と作ひの色そ田のかり云儀とらひろ
まいり又故に京地ハ吉野よりかりく也
くらへ猿の康狩をいひすきを下あり
とこそ

一 たのむの井戸　純作
清義
枝宮のつ田中此井との秋風に稲葉をとあくく康くは
国光院入道
なりつ

一 たかまの

細中
いくとせか田つくれともあかぬかなその田とこそ分もあらく
口五月の比代なからんとそおもひして鳴くらん
色香まて賤か月の比を山のかくれかへる
あくしもつみやまさかたや

夫木
ほとゝきす鳴つる夜の山道にいくたひかへる人を待らん　影昭

一 たこ野のしほ　津国

一 たかの三浦　丹後

拾遺
旅人のわけゆく浦のなかそて野辺の名残山のかくれかへる
新拾遺
高嶋やみかみの中山越えてゆくよもすから千代のふることく　能人

高嶋や雲乃稲のふく風の夕暮は鹿も鳴なる　僧基法師

一 たかつ　摂津

春秋の月は昔や思ふらん高津の宮に白く梅かえ　覚延法師

日
見わたせは難波の海の高津の宮の跡のみそ残る　按察中納言

一 たかしのはま　和泉

金葉
音にきく高師の浜のあた浪はかけしや袖のぬれもこそすれ　一宮紀伊

あた浪の高師の浜のそなれ松なれすはかけて我こひめや　定家

新勅撰　津国
大伴の高師の浜の松かねを枕てぬれと家しのはゆ　東人

袖中
奥津浪高師の浜乃松か根に夜ふくる風の吹まさるかな　夕れ　順徳院

○たかしや山　高師　紀伊　高師　三川　源平盛衰記並ニ海道記集ニ有リ

新勅撰
雲乃ゐる梢はるかにきりこめてたかしの山に鹿そなくなる　鎌倉右大臣

風雅
白浪乃たかしの山の麓よりまた越ゆる風の松に吹ゆく　従二家隆

月清
永き夜をあかしかねてや月影のたかしの山にかゝる白雲

一たかせ

拾遺
岩間とちし氷もけさはとけそめて苔の下水道もとむらん

日
誰か袖にしめてしかたの河原にて引乃かりねの夢そみえける　良経　日

新古今
たかせさす川原の柳露をおもみ落ちつゝむせふ浪の音かな　権中納言　公経

後拾遺
川舟のもり乃浪をたかくてうらむ舟人の袖の秋きり　右衛門督　法師

日
鵜飼舟高瀬さしこすほとなれや結ほゝれゆく篝火の影　寂蓮

後拾遺
夜の雨さへたかせの淀のまこもくさ草まくらみしかき夜はに　大浦

一たかまと

新続後
さひしさは秋の宮乃内　浪のかゝるた月の夜そふけにける　法皇御製

続古今
たかまとの野辺の秋風吹まよふ萩かみるかに秋はきにけり　後九条内大臣

日
春霞かすみたなひく月影清く照らんたかまとの山　赤人

日
宮人乃袖つきころも今日かへてなにしたかまとの山

万葉
かり人のかへる野辺にうつろはんと秋萩の花さけ行は　人丸

続後撰
をとめこか高円山の秋風にしくれてかゝる袖をしほりつゝ　後京極摂政

万葉
たかまとの野辺の秋萩このころの暁露に咲にけむかも　家持

○たかまとのおのへ

新古今
萩か花ま袖にかけてたかまとのおのへの宮にひれふるやたれ　顕昭

万葉
たかまとの尾上の雉子あさなあさなつまにこひつゝなくねかなしも　[illegible]

一たつ田　立田　又云天竜

続拾遺秋
立田ふかれし高田の山さくら雲かとにほふ花のちるらん　前大納言

日
葛城やたかまの桜咲にけり雲にまかふる花のしらゆき　家隆

新古今秋
雲井なるたかまの桜散にけりくらわさつし衣の袖のにほひに　[illegible]

日
みつゝきやたかまの山の桜花雲井よりこそちりまかふなれ　顕輔

一同名　石見

秋上
石見のやたかまの山乃木の間より我ふる袖を妹見つらんか　人丸

一たかやま　高雉山

[illegible]
なかき名のみとるたかの山たかひかてつの君かちとせの岩にまかせん　読人

月
鳴やたかのの山の玉椿かはらぬ色ハちよもかはらし　延房

[illegible]
たかの山清瀧川を唐にしてこそ昔ためつる松か下道　冬基

新勅撰
清瀧のきよき岩浪高尾山吹をろしけん風のまにまに　上人

一たかの　紀伊

新勅撰
たかの山奥迄人のこゝろさしハ嶺の月影をそま迄　冬俊

後京極
我ふかくそめし消えそしたかの山たかきうき法のみちかな　明神

風雅
みちたる泉やあしひきの高野のおくの玉川の水　紀法

暁と高野の山に待わひや昔かしこき有明の月　寂蓮

生まれてはすての法の道ふみわけて名のみ高野の山　[illegible]

一 たかさこ

古今 かくしつゝ世をやつくさん高砂の尾上にたてる松ならなくに 読人

拾遺 高砂の松にすむ鶴冬くれは尾上の霜やおきまさるらん 元輔

後拾遺 鹿乃音に秋をしる哉高砂の尾上の松は緑なれとも 俊頼

千載 高砂の尾上乃桜咲ぬれは梢にかゝる奥津しらなみ 賀茂成保

新古今 高砂乃松も昔に成ぬへし猶行末は秋の夜の月 寂蓮

新後古今 咲にしも花の梢ハ高砂の松とともにやまかふらん 真明

続拾遺 立かへり秋かたくゆかん高砂の松の尾上の雲にかゝる夜浪 秋郷 成茂

新後古今 高砂の松と幾世をか成ぬとも信てふ露や猶ふるらん 保守

続古今 高砂の山の山鳥尾上なるをつゐのさまに秋くらすらん 法親王

月清 秋の夜も又麻の声告し高砂の尾上の松に吹らしの風 定家

高砂ノ千年ハ八雲御抄云高砂ハ山乃名也右(?) 依比叡山をも高砂の尾上とよめる事も侍りき 六条左大臣ゟ給はりて後柏原殿左大弁 左大臣男宗上播磨国よりのほりて高砂ノ 乃松みて宿りて高砂とたつね給ひ侍れと 昔を思ふもあはれや侍るに

高砂もたれかしる世の昔なる尾上の松はしられて(?)

一 うけ 嶽

為集十首内 影清き水の光をうつしけり日の光さへ奥の沖の山まへて 後鳥羽院

家集 我恋ハかねのこゝろけの事もなくてもみえしの世もわすれかね 仲正

日 ひえの山その大嶽ハこれわかく清水の川ハ流くそうか 俊頼

一 たにの数

秋詞 奥や深き色よ深き谷の数 祇

秋の頃嵐の奥や谷の数 月

谷の数絶めや松乃緑こそ 巴

谷風乃吹上雲間木末哉 玖

吹のぼりつる谷風の下葉哉 巴

千五百番歌合 春来ぬと氷をとくる谷風のをとより絶て山川のなか 経家

拾遺愚草 谷風にたゆまぬ松とみえながらさやく行かふ花を 前大納言為氏

千載 三室山谷にや春の立ちぬらん雪の下水岩たゝくなり 中納言国信

同 雲ゐ乃昔の跡をきてみれば山寺きさ風よそ谷風 寂然法師

源氏 光なき谷には春もよそなれば咲てとくちる物思ひもなし

まえ 吹のぼる深山の秋の谷風にあらしもきえぬ花をまちけり

六百番 世中よしらずも花咲谷の水汲山人よ衣打初らし 光俊

仁和寺宮百首 湖そらや桜谷より落す水の流花さく宇治の網代木 慈鎮和尚

月清 霜とみつゝ友山乃谷風よ花の雪ふる曲なく成る

初瀬谷　桧原谷　小倉谷　行合谷　深草谷

右谷ノ寺 木家

○ たにの戸

谷の戸に独ぞ松も立りける我のみ友はなきかと思へ 西行

下くらき年深ある鶯待つゝしらぬ谷の戸をいでぬらんとぞ 定家

○ たにの鶯

今宮 山里を深き世の中を離れて谷の鶯ひとり鳴のみぞなく 桜政 為氏

○ たに川

月清 谷川の岩根かくしく青柳の打はへ春と成し音哉

良経
谷河乃顔の櫻の陰乃んえてくなたらぬえてつかへく白浪

一 たなかみ 田上 谷上九

新古今
衣手に田上の山乃朝霧もたちわたるきてつ春をきたるらし　荊大納言 中院

新後拾遺
万代乃ためしにつくし田上山秋の初尾花すすきひかりの稲　正三位 浄家

一 たこ 田子

袖ぬるる人遠ひとこそしかるらしかるとふる雨ものとつへう花　宮内

新古今
唱へつくらり田子なりとはの蒼ぬ袖を雨をつてぬれの五月雨　うさき　伊勢大輔

千五百番
衣縫つるるかとも泥のまへに尾乃心田子なりとそ作衣まて乃つ　越前

廣くかさよ民の草葉も秋の露祇

哉乃りのたまくを民をしくかも　なかのまつ里に乳なる乏涙に　歌

伊勢物語
納まる国とそみへけり長民の草葉も風にたなびく　左大臣

拾遺
宮まもり泉乃杣に立民をも人けむれや花とよくらん　左大臣

風雅
草の原や乱し国乃風をいとく民の草葉もとろひく也

月清
民もこれ三世りんをなくそら山志てもめくらんの雨潤世よ

家集
おさまれる神の社もまれ世中にさかしき民の宮ところ　長宮社 摂政

いかに遠しと宮の氏をめきぬよく知る民と思つらん　入道宮白

月清
たりみへく民の草葉もおけるかな花のの流代まかる春風　後京極 摂政

いさこ又民あられやいりなて和歌代まつり春のちしめ　法皇 御製

雨乃雨と人と民をとや　書人等民也　説人を

云卜説也　雲乃滴掛母乃民也

古新続
流れ行民の水とそのし世も　湊江に白浪たかくしき懸けて
面影そむき流さんやすり　雲　君か代の民の事わきゆきつ去て

○ たみのと

民の戸に秋や白浪寄る濁　同
民のとにおひかはるの水かな　也
民の戸の都もわかぬ霧かな

一 まつの北まや

伊勢方千句
秋の田のまさにもやみの世の様　浪の屋とりつる北徳さ　日
三
言ふもむかし君はつくらん　長　猿のゆふさぬ宿に思ひ鬘　孔
おもふ人思ひのこしへしあれ人のうかれ徳さとかし　かり

一 たね

稲もたね花よ咲ね宿も雁もたかし露んの子さうす　左大臣
御製
秋くれて露に草木の種いはまきてかねに面影ありかり　皇后宮
続千載
稲さえるもこの水に月流て野やとられ胸のさわるとも　俊成
同
うつつは心たる人を稲ことも我身にあまりとる仍をとうるん　平宗宣朝臣
夫木
稲しわれは老いても松に生なれり思ていま心はわかるあや

○ たね蒔

拾遺
思ふことなくてそみまき種々に生るもかり雨で春事は知しとそ　恵慶
夫木
種のおかす小田の苗代忍ぶるもかのやまきてしも　恵慶法師
月清
種のそもまさに取ゑ代に生そそ春の稲さきしかり　親隆

○ たねつもの

秋をとる蒔や白井の稲つもの種

たけの橋面に付してとく國字所也

一 たけた　山城

後拾遺
こぬ人も秋を露けくさぞ芹川や竹田の里は笛にぞありける　後人

詞花
秋はてゝ竹田のさとはなく田鶴のさはべの時雨秋さりぬらん　撰上 三河女

後千載
契りおきしかんしやう萬代の夜なくや竹田の家の露なるらん　法皇 御製

一 たけ竹

年ごとに竹のそのふに来ぬ君が袖所也　吃
あまた子代や年まよひ露の　兼 敦

若松いせ一つ竹やまたの薗　月
千歳のための法の花ちかしもの古所也　巴

後古今
百千鳥今のいそたけ篠竹の大宮人よちつ拾遺もさく　今上 御製

今古今
我宿はいさゝ村竹吹風のおとのさやけき夕ぐれの郭

○

川邊草竹　天智天皇の異名

新古今
秋風に忘るゝ松も通ひあり川邊草紙竹といふへき

○

あくたまら　竹枝　江　奥儀抄に見之

○　月

撥とたちいふとそ思しきつ枝さきて枝におれは雲もなく

○

守けたまら

○　月

七卿乃生六末霄は中空や竹枝にかゝれ雪ふりて乃包　少伝 御製

○

いたつけ　但名ある

○　百首ノ云内

思かたに竹の中枝のきえてわかれや涙よ汐風の戸にも涙けらん　光俊

○

むかしさ紀竹

○ 花ノ言モ家集
しきしまの竹の籬乃夜ことに露ちさりなるそや思ひ深く奈年 家隆

○ こゝろうけ
八雲三 三十首
百敷乃竹の砌乃三川飛君乃代の?かくうつるや初まも 入道摂政

○ しのゝうけ
新六
うきふしの恩ふるさとへしのゝ竹思へ下にぬれぬまもなき 衣笠内大臣

○ 紫くうけ
夫木
唐竹の葉にふきそよかし探ける面白く風の吹くる

○ 夕よもあや
拾遺
花の色にも塵なくなんなよ竹の長夜をも路しかくらん 文輔

○ なよ竹や若きなよ萩の色 歌

○ 夕よ竹かんゝ色つゝる花の色 巴

○ くれ竹
世の中はさまゝに憂かりけり呉竹のうきふしことに鶯ぞなく 読人

伊勢物語にはおりかへし呉竹のよにはなき人はおひえ 日

○ たけ乃子
拾遺
世中にあらぬふしあるなよ竹の子はわが身にさらにかゝるけり

古今
今更になにおひ出らん竹の子のうきふししげき世とはしらずや 凡河内躬恒

○ たかむらよ
日
まつこそはこゝろに竹のよわくぬ竹のよわきにわが身は数ならぬ也 読人

○ たけのは
飛ぶ鳥ぞ竹の葉の肩に弱る数 杜牧
東坡竹葉酒トアリ 文選 醪 壯竹葉之アリ
酒ノ色ノ名也 酒ヲ緑ト云 是ヨリ云来侍るなりとや

一たけのその　天津枝　枝ノ花ニテ皇子ヲ云也

廣堂
年をへて生そふ竹のその内につきせさるへき君か齢

日
今日新植さるゝ竹乃その子代〃や世〃にかさねん

此二首ハ親王を読り　親王を竹の葉といふ

一たけのはやし

風雅
梅花ちるまく行て見む竹乃林にうくひすそ鳴　読人

一たけのした

日
笠取乃山の梅しもさくれは一夜雨とかる竹の下道　平兼持

續古今
傳えこし代〃のをしへとしるへ哉竹の園生の世ゝの白雪　法親王

一たけかは　源氏よりハ竹乃比喩　此外ニ竹川と云ハ

竹川乃橋打出一節にみつさんのありふるさまを

と云哥なる也

玉かつら乃大臣ハ後のおとゝにて尚侍殿に

あまた君たちありけれハ姫君二所おはし蔵人大将

おほしたる君たちありけり姫君ハかけ給ふに心ありし人〃

いひし是ハ此君に給へかけりし人〃ハ此姫君を

此君を玉鬘乃女の姫君乃母其かうち

給ふを面白くのゝしりいへり給ひに君

碁うちまけて桜をかけて

桜ゆへ風に心のさはかしき思ひくまなき花とみるみる

妹君かち給ふ

○
風ふけはちりあとなき秋ふかくうつろふ色の雁かねはみゆ
守けふかの乃さひりを
竹川のたもとの語なる荒川りをとりなてかさし

一 たかさこや古　伊勢

彩初撰
呉竹の夜ふかくの越とやむしに赤ら子と寄れ鞍なるかし　中納言兼輔

一 たけかりは　葦狩

松か根の葦狩行て紅葉を袖よこし山嵐の風　寂蓮

一 たけくまの松　武隈 奥州

後撰
うへし時ちきりやしけん武隈乃松を二たひあひ見つるかな　元善

奥儀抄にハうけて後の書ハ宮の世よつへんん抄丸
なかとおもへ時をよく後まてしれる事也
此書むつのくにあるふるかはしと宮内卿元輔
元能といふ人はしめて居舎なりし人中陸松也
此人二度彼国の守になりて後の度よめる也
哥也武隈の松ハふたきの雲たよりあり
武隈のたかはしとて陸松の二あるをといわりも
たかとハ山の出ぬかしこにたきを見むかしにや
志て此書ハ歌枕文字に焼亡の滝源の満中なれ
又うつ文そうせてかの橋の名負か住れり
橘なかうの長志かの其位落義住り切く
橋の流くりて絶たると云うそてかのなる也
とそ云し

○たけくまの松

古今
我のミやこへ…と云ハ武隈乃…松とこそ

後拾遺
陸奥守二木の松を…云り

武隈乃松ハ二木を都人いかゝととはゝみきと答へん　橘季通

此哥則光乃くたりてよめるとあり

同
武隈乃松ハ二木を三木といふハ能よめるにハあらぬなるへし　僧正深覚

季通か哥を傳聞て読侍とや

同
たけくまの松ハこのたひ跡もなし千とせをへてや我ハきつらん　能因

一 あこの浦　伊勢

風雅
くもりなくてらせる月の…やとる万代の蹤なり　宣方

一 たるゐ　美濃

詞花
昔見したるゐの水ハかはらねとうつれる影そ年をへにける　藤原隆経

一 たちの　武蔵

續拾遺
今ハ又…秋霧のたちのゝ駒ハ…　彩…

拾遺
秋霧のたちのゝ駒を引時ハ心にのりて君そ恋しき　兼房

新勅撰
けふよりハ秋風寒しあさ衣たちのゝ駒の…　信実

千載
花薄ほのかに見えて秋霧のたちのゝすゑに男鹿なくなり　大政大臣

一 あさか(?)川　山城

万
…の清き川原にみそきしていのるいのちハ君かため也

一 たつれ(?)の浦

拾遺抄
君か…代々にかはらて…ならし[illegible]と云也

一 ある川　駿河

万
…川の瀧を清みか昔より宮つかへけん…野の上に　家持

一 ありその池　越後

宝の池の心ハ八功徳水の事本文ハなし

一 たまくら野

新続古今
ちゝさしも眼も枕の花なれハ
手枕乃野邊の草葉ハ霜枯て身ハならはしの風の寒さよ　兼好法師

一 たまくら

千載
春の夜の夢はかりなる手枕にかひなくたゝん名こそおしけれ　周防内侍

同
契ありて春の夜ふかき手枕をいかゝかひなき夢になすへき　大納言忠家

袖ぬれてまくらしかたきよ[illegible]

一 たゆく

拾遺
手もたゆくうへしもしるく女郎花色ゆへ君かやとりぬるかな　読人

新古今
手もたゆくならす扇のおき所わするはかりに秋風そ吹　相模

金葉
永日のもとる花[illegible]刈萱のゆふてもたゆく[illegible]　家経

後拾遺抄
[illegible]

一 たをり

手折つる露にそぬるゝ女郎花
手折りてそ見る秋の花なれは
なかなか[illegible]手折つ[illegible]

夫木
花さかり[illegible]手折かへる花山さくら

一 たまきの庵

拾遺
[illegible]手鍬のいほを[illegible]　寂蓮

一 君しこハ手なれの駒尓刈かハむ盛過たる下葉なりとも　源内侍

川千　大あらきの杜の下草生ぬれハ駒もすさめす刈人もなし

一 たちからを　手力雄　信濃戸隠の明神

反撥　岩戸わりさしこもりたまひしかハたちやみなれハ常世を

奥儀抄天照太神岩戸に籠給ふ時岩戸をさゝせ

なけ給ふ神ありけ奇な思ひかねの力と明給ふ悦

女乃力なれとも息き儀をもてなすとなり

一 たりし

袖まて入ぬる露も花野かな

昔ハ袖ふりし清めつゝ　擣衣むかしの花露にぬらさ

羽無代家の衣にしのふ　既袖ゆたか女色されし　左月

嵯峨しき紙何より白くそむる袖ゆふさえくれより紙

大和物語　草枕旅をしわけハ唐衣袖ゆるこそ雨にとまそそり

古今　秋乃野の草の袂か花薄穂に出てまねく袖とみゆらん　在原棟梁

思ひ寄いつしかわらる袖の間そ恋の玉くるかな　反二条 親前

拾遺　逢ひ見ぬ袖の涙たゝけさ手くらへの思ふに恋の袖　ナリ

一 たか

狩るとても弱りぬ小野の荒野かな

着鶴は巣山乃そら仟野の雲　挂

○ はしきたかの鷹

朝狩の霧は内の声そ雨り白毛流るゝすハあつけ乃かや

○白尾は筆一條院御宇治拿は将の時鷹を白
山城国より出しに筆にいとられ源正頼にて尾
を二きりて白紙鷹紙流させりきるゝ尾は上白き
と見へくまふとして[illegible]まゝ雪ましんわりくる流門
御本に當らし時正頼
二羽乃白尾は鷹をましるゝ思たん[illegible]しるしなくいし
とけかきつゝりまゝり

○しら梅　くろ梅

紅梅注
しらやうちましるゝ山の鷹はひとつの見雪は見合つゝ　良経

百首ノ内
梅かきにしろ行野の色と猪にゝ[illegible]くろ梅の香を雪にゝる　隆房

○きくろ梅　あらくろ木ほきよりて也夜の花にもいり

三百首
秋の野は鳥ハ[illegible]こそ女郎花ものゝ[illegible]きくろの　定家

日
霧立木ゆふの原は夜くろうつき尾や鷹は白鷹なれ　日

日
寄きゝし夜萩の鷹や秋霧もなる花ちりて鳥とかくらん　日

○うら梅乃鷹　世也　是は略

三百首
秋の野の尾花の露の萼数と百々に流さる梅の鷹　日

日
鷂日さや門田は原一百きゝ紀をとにまさ梅の鷹の萼数　日

○そて梅　萸ハ下八[illegible]

百首
紅ふすの萸対に鷹るのしくしく山居也らや[illegible]らん　西園寺

○わをさうしく　又鷹トアリ是ヨリ来ル萼鷹るの[illegible]

日
春の野に[illegible]すの青をさうしそめかくさう[illegible]八幡を見さし[illegible]　日

○かしらき鳥　足有鷹し　希有や

三百首
鳥羽乃足羽は鷹るやあらと云足のらいわの鳥と捕らん　定家
八ツ羽の雅楼は野に足三さしとさり[illegible]雅還さし

○鷹に踏と云は雉をとりて又ハ勝て逃也ナリ

三百首
箸鷹の尾ろの上の雪は八重羽ぬきて見るも乱れ持つ　定家

○さかさ毛　鷹の尾の上ニ毛先をやにさかさまに生たる毛也

日
くれは鳥あやめも見えてなるさか月毛ハいづれまさる鷹の尾とするらん　日

○さはかけの毛　背筋ノ腑ニ有毛也

母鷹のさかの毛ハ節に長の羽やおとるらん鼠の毛らん　日

○ときくりけ　又このけ也

日
若鷹の尾ひろおろくりはとくりくり毛となるふしやおほし　日

日
時をさて岳も見るより鷹の尾毛の落るも絶て　日

絶とは尾の中程をひろりくりぬるなり

○ちかけの毛　鷹ノ羽裏と云

日
時ありて秋の山なる尾は御鷹は日かけ毛さへ見るもの　日

○左衣毛　尾脇ノ二つ三つ有之毛ノ下ノ羽ナリ

松原ノ毛　腹ノ地ノ毛ナリ　さし衣　定ヲ塞毛也

かけの毛下をとひの毛　こけら毛　鷹の内頭の毛ヲ

ぬつろ云リ　いづれも同じ事也

○雀鷂　貝日乃背ノ根ノ毛ヲうつくし鷹也

小男鷹　白ハ見えくる通る　雉ハ八月乃さし背

根長ク悪鷹ナリ

○きさ丸　鷹の一名　伊勢男鷹　上日

百首
落草よたなくそめらる在居にやなき物をそて橘らん　定家

日
はし鷹の鳥は立羽ゆく在居丸と云

日
白鼻気乳はなりたるする麻山伊勢物の鷹に似たる日

○うちとへ　座居とハ山脇にありける也

三百七首
○産屋とかへるせよとし鷹ハ左のまとよりくこう定て　定家
○あつかり　葉より出狩
日
口餌にはなし山角（ハミ）をとらする鷹あつかりに母にて八葉にうつ　定家
○とねり
日
秋の野のうつるハ狩鳥にひまりれすりぬ鷹の名ん　日
ひまりとハたちよりそのくつえのふとく母して先よ
ありの狩立りをひろあまりひまり方ふくる八上てあり
鳥をとうけてとくとも

○かりとつえ　桜の木と用とや　桜と立入候り
日
羽師鷹ハけの羽とハ桜あかり向うちてう木山の下　日
特桜乃事ハ文字ニ入　伝
○ちこほし　しトハ鷹目ハ下手とひくかりとなり
日
張川戸野毎出ハ狩人をちゝかりともやかんうへかりまり　日
○かへり鷹　しトハ鳥一二鷹目前先ヨリ合下上之
○狩人乃羽とそやしろかひ合とくる鷹やかてくしろん　日
○いつやし鷹　しトハ太ノ鳥とら夜そやられともんくとて之
百首
太くひのもやとて乃狩声とを居あの鷹よう始とくハ先つ　西園寺公道
○うさぎ　荒之大鷹のとる鳥ハ内也
三百首
秋乃野のまもの彼を先立てきつ荒の鷹やおちん　定家
○いよたの　伊豫鷹イヨスノタカナリ
日
伊与縁乃足山とみる三羽にのおしきてかくる伊予らん　日
○しらたか
今日そ又きりの鶉かり宿鷹ハ去肉よふつ次の雨の勢　日
あ雛こ年し昭日つかんとて八肉とひつきそろとて

雑と飼地之日ヨリワキテ西ナレハワカハ文ニヨリ肉
乃外餌ハかハりし也

○くち餌

三月
わし鷹の雛をとらへつゝ飼かひそめしくちは口餌 定家
日
なつけ伺ひて新鷹にハ口餌かんをそやさし鈴のふん［らん］ 日

○つけかくろ

鷹の朝毛もふる鳥のかほ［ゑ］をかへ見わけ毋衣飼の鳥
かへ紀時の月に之撓みそ咲入ゟ衣もかの紀飼ハ毋衰
乃鳥ハ撓をの也

日
夏野ゟり山鷹の衣飼男山せるとしるをつけかへる 日
月
ゑり飼ハ撓つゝりけ生鳥やさわ出の命あるらん［うゑ］ 日

○むしろ山

月
氷室山ゟかゆゑ夜深見ん鷹よ飼をとほそくらす 日
けふより出して去めてあり遊のしるかや氷室山
とらその中へ樋をかけて水をへるを下行
ありと云り

○こゝこそ流の鷹

日
淡山やみさゝきよ鷹けなり羽よ白くやまさと飼
鷹るむつけく鳥を追ひそして羽をひろかさく［孫人］
拙かくしせハさかさとありなと流かあく娘く
ところへのさつかくさかるの毛かり流しこそ飼用［すき］
く鳥狩樋をの也

○

三月
ゑあつき
ゑ猿ひとへの毛立て葦鷹やとさへれ阿よ浅けすらん

○もゝちとり
鶯はしや誰と袋にやとりすつれ地に秋なりつ 日

○すのこさす
鳴鳥を取らむとゆふ網はるに誰のこゝろにて出る持人 日
雉は誰のしるしをきて待しや藤をわりそくしかな
鈴のかふさすとはまさすしと云り

○くれとはふ
日 大鷹の鶏とはく藤若に鳥りまねく誰の下に 日
くれとはいふとは見まよく鳥とも見るまとも鷹
とまりかくくとゝまるとも云

○むこうとりあとりし
三百首 藤にも大鷹のむこ鳥つかうに二つ見そうる野への持人 日

日 よめ鳥は大たかに鷹の秋の爪とて本此つかはよ論の持人 日

○わせ風 隼ノ一名也
百首 もけもくも藤くる狩の冬山の雪にゆ海ゆの翁の翔うせ 西園寺入道

○むなの法鶏
三百首 まかふの枝末の下麦此法とうつる木をとまつかりゆうらん 定家

○こ乃そ 兄鶏 又児鶏ナリ
ろくく 雲雀立野辺の末萩乃得花に摺る秋のまてにのり 西園寺

○ひもり鷹

○みかりの芝もゆうゆる雀雀鷹の野をさへ生つたり日闇きつ 定家

○ちいなゆかけつめ
日 そひ寄るく夜かけつめやそい鷹鳳鷹うちえなるもらん 日
かけつめ内のくろこゝろあかそ状なと也

○ 忘川さい

三百首 行脚と私鋼お前忘川さいのいはしてくたうつしとる哥也　定家

○ みくの引ろ忘川さいはうつれしハわりせそしや

○ たさむ　衣をる袖かさ入てくちうといふなり

日 露る九お山の梺康の里つまし里の衣まりもそさ角まやさむ　日

あるをまても行つりも流くる袖をさむ九云

○ 日 物数とき川の淀えし衣領の宮地のひ袋打鋼よろし　日

○ うちのひかくる　打鋼袋や

百首 ちふ鳥もつれとそろ衣領のうちかひ袋かろくかんて　西行

流れ行るつく高くるて明り衣逆擲そして鳥よ　家隆

○ 南とた領衣をおめくさいくかくろの鎖と領く

板うちのひ袋浮かんてろしや打のかくりてうちひ

○ かくろくえり

三百首 ちし露るに口忘む千すかくらまやうちのひ領て依むたひ　定家

さつ秋くえハ衣とやうそく文おのたへゆらえり

日 様くくらりの露にかうらねみちらその山おちしうる衣の打鋼　日

○ すにえ入

三百首 巣おつし峰屋の内もちも明にしきそやらきとあわん　日

さやのうちかに秋露ちえると入て礼とそそうもんなや

○ 梅をえれ

日 さし夜と深山嵐の宮られハきせても出うる露の光せ　日

さしおしく背にいつしちゆそて露る也　俏

○ もちくつ

いろしてぬとうちをかんえぬりちら露風むる羽とさらいて秋らん　日

鵜とりとは鷲の後也それは羽のうちなるべし
丹ちくさしともの也

○てしさ丸　頼方の羽なり或是流鷲の大名也

三百首
いふしても何とかきしや世の鷲とも頼めかしは屋戸の初かり　云系

○乃あまの鷲

百首
流将人射とられぬ鷲る山より出るくまかへつきてゆく　西要寺

日
玉ほこの射とられぬ鷲る山より行あふかたは白きぬらむ　日

○山まて年経くもとしろ鷲とこそいへり如編なり

○とかへりの鷲

秋の鳥八とかへりの鷲と成てまちり年八かまへ尾毛と云ル
服題云鷲りかへりと云支證八毛のかはりかはると
云かはくと云八毛る屋まて毛のかはりや山かへりと云山
まて毛のかはりと云支證と云と云古文より
毛る屋かへりとこそ云事也思ひ侍る也

伝授
云ルとハ思ふ心はかむし羽師鷲のさかへりる山乃椎も落と
とこそいへり此前ふかくハ山まてかへりけるをもとかへり
とよみえたりもかはつりけり

○屋あかとちの鷲

新撰六帖
水篁の思ひ痛はるかく矢取る鷲の鷲の居て出つ狩人　雅縁

奥儀抄
矢取る鳥とハまし鷲を屋とかへ居の地にてらうかくれ
屋かとちハ矢の羽乃故なり梅とこそいふなり
このとかハ山そもとかへりしま里深山なり
伝抄たかまきとも也

○たかゆき

弘賢風葉のたの
おとしられもいつ
延喜よりあつさす
承保の頃より
の附風葉のた
のねぐらしられ
内裏そまつらむ
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]

○うた
たかさごの角の松ぞかりてや世乃声乃あをり鳳凰きらん 一本鳴る
延喜御宇に此得り鳳凰草は左の松と称く也
ことの由かく鶴の居させ給ふけりとのせ まて
り鳳凰草は左乃松並木にや右の松をとられ流 とあ
流しる様をしわるとせ
もしや乃鷲
奥儀抄
いそぎのつ手実は鶴の立羽親のあふ小鶴のえ絶え
此奇は人山出羽乃手実より逃田地とて鶴
と帝へまいりもうし鶴をあらはれ八幡へ
さいりて鳩乃いくらしも五十市よまりやそてつきありきらり
ほりかえしも鶴をとつまでくらせてくり其後白鞍
るく此鶴内裏へ参りくり過すよ血流たくりを
後頭とたる出羽より仕へしらた手内裏へ
きりかせてうけし鶴の巣おろしの鶴也子に捕く
後其母鶴もふくられさりしと年々は此は鷲
鳴とつまて来りけり母飛さりし鶴は巣子仙
入く鳴しおもふ小けり鷲鶴をと喰殺し年
失くらしやこの後はいくれも鳴ぞ八幡へ送り
へり此鶴のをとりやく名付させ行て鶴の飼
ありおつすきせ行くらむしく小嬌しく思ひとき

○
三百そ
こもはらうへ
着鶴はさひとろありかりもらしかも手は羽やつかん
ちし鷲はうりつらあえのかりやと報ひてかね西のらん
あもつらあえとは巖を鷲とおうとこあのころや
定家

花さかり桃つちのこゆるかなもかな
こうしゆへ
○たくみ花　子貢之
○百首
あらたまの八霞のたまさくらしなもとく持は花の春の定　西園寺
今世ニハ一ノカケト云リ昔ハ安ヤ花ト云リ又撰ヲハ　もと
○三百首
蕣卜云リ
新鷹は足へみえ能もさそひなりけ花の君とかや　定家
まつかけし　きん
○日
新鷹は尾上の雪もすみかし鳥は足ともあかやさく　日
風ちゃく法之よ夢ながらやかさのさかも秋のうき路　日
もしあら花初しや出ら秋風よ南こ浪さそふ名所らの川　かや
数多しらうはしわへけ着鷹は成へしはしけそしれ
着鷹はみかりの成刀へして狩雪そしても今日は狩人　ゆふ
いまぬふかさみて花もおへきか称さの鷹も狩して　同

一たち

六帖
世は年へなわれてとのなのつもあくしまの太刀もかし　衣笠内大臣
百首
たくさらはさやはたへきて思へともおもて恋すま抱きそ色　為家
名所百首
旅人の草は枕ふ太刀はさやの中山ならや中山末ちる菊　家隆
なれけれはけふ太刀をならぬ抱とさやれらの名ら花実たり
万代をあるたもと祈りく太刀つくりえてとるしこ代り人よ　藤原為家
以前ハ三条院く中宮亮ありて義親ありて
行てり夕りかはりせいく事つかまく法勝院
大入道殿二代の御祝めく続経へりの御奇せよきら

延としハ第ノ代也太刀治ほくり忘てハ天照太神の御孫
天津彦火瓊々杵尊に葦原清穂國乃主とならせけんとて八坂
鏡草薙劔ヲ皇孫ニ授給水天垂と作り是也
其ヨリ代々ニ相続して此鏡此劔ハ帝御護有
又神璽ハ國ノ平らかれ治まれ世をまもる事を續給ふ
るやけきをたもつ劔ハ天叢劔と云也野槌と云テ
かためえしと云乎コトシ　又一神柄をかとも云り此事ノハ
究テ秘義なる也ハかくこれしるしたり書也古経抄（遺）
すりんえさり文武能えと云所なる也ハ太刀能えと

云九

万葉
初苗よそとのさえ雨と流くるく鶯はんと流れり　慶政
是ハ流くるえんと称り田をとつくりえ（うる）云

一　たちはな
橘ハ樒よりうつる白ひとれ
たちはな式部合に出る也
たち花ハ雨に白う樒柄ハ
おもふく花ハ橘のかをりハ日
仙人の宿や橘をあかめけ日
又月澄花橘乃ちりしや又ハしのひし人乃袖のかをり也
法雲氏いさぎよく霄月の村雨よそひ風ならく白かさらむ　藤原基家
古今後
八幡乃宮に夜の衣をつ　橘ハさきの袖乃移り也
新古今後
消えよのこる袖のかをり　橘の樹乃露をおくや
村雨の飛とび散る郭公　花橘をおもひやる
ながむれバ花の香にほふ　橘をかをる夕の郭公

子哉 五月雨ハ花さきちれのあとの長く月池殿を右かへ わ里 みやこ治

ます 右せられ候得者の御座候て山河なる時より記号ヌ

橋ニ粟津原 志賀山 流くて山井の里 みちの

花ちる里 さらしな 志賀の都 志賀 わたなべ

わたなべ里 志の海の里 住の江 嫁入

一 たちえ

新宮の梅乃立えやかんてつけん四ツ乃が里上ル付候 道風

一 たつかう

ウタ わ仮母ら之紀能婚信母刊家の星加ら由流浪ら住 安

入内新部帝 清貞姫奥儀抄云辰卜云女らに似るるら

是は人の如くかと世俗説なるかめり女ら毋

滅しる節不見そのらんり後ろ新寄かり 但

曽丹寄とり

抱たるかたら山のなりた時そ姉そ風ハいとく急しき

是ぞかのんいやわらんかさるとハみちの国より

有とこら是文ふ當 奥陸国乃名伝ハわちろを

云めり式人云け寄 抱たらちらさら山眉さをそ

とらさる時を妹之恋しきうく逢へし上らく

かをハ海中の岸てトヨヌルモ遠からん也 いまもり

流くへさむ九不思とも侍り文辰らとの事也文字

かしらう

一 たはれ男　同書

万葉の書にたはれ男と云遊 類

たはれ男とかく竹川のあるしに 数字ハ 今撰

流乃上にあらたにたはれ男も楽しむ人よりたゝおほし 基家

かくたちしほとこそ秋空をたはれ男のくれんそのたゝ 知る

百首の花の細さゝ秋の野に思ひたはれん人とかゝ 地

○ たはれ男は戯

世中にそのをたはれ男のうしろかくつまれと此色源氏

戯とあらはこゝにたはれ男のつまとしていひ語とよくいふ

ろもとも云へりさ語くたはれとも服之字を

もろ人とたはれ男と云り又蜀之葉より

瀬の音されるとむかへる別の方也

たはれ男とかく秋も作とあり富くしす秋とさとかもみた男ハ

はたれ男ハ語也リンリトハオメテレトモ云ハ

ときけと秋とさうあすさこうかさ花語と語り

ともいへ人も申候也又云東國のとゝのへ

云ふとこうり語ハうしろ名語をゝある

よこそと云

○ たはれ男

古今誹諧 古川柳入日すかしき　里の子ハ秋上よりもたる

津の国の難波の春ハ夏冬をたはれ男のうたに見えたり

秋くれ野へよたはれ男も同じ人のうまのへさ 読人不知

一 たはらめ　婦人

入日のうつろふ夕凪　婦人のきしみ袖よ花ちりて

今案
色々藻同じ縁を婦人の浮をありかりうき風　定家

婦人の袖かへす夜の花かたへ人のしやたらん涙さん　頭中将

百首
婦人の袖かうよくふる雨の夜や子篭のならす　好忠

名所百首
三輪えの流ゆくすゑ婦人の香のなきあとかな　定家

婦人の袖をかへすと花の風吹かよふあかぬ恨を　野宮左大臣

後京極
花の風川音まてと婦人の袖よ手すめの春の夜の月　中務卿親王

名所
春くれし早苗の住よ影かなしく雲井の花に婦人　定家

一　たらちね　たらちめ

う人のをまつりしきよの話　たらちめは親のまもりなる名を

たらちねのなさけの露　たらちねの親のうきさへ
はなり

建保
たらちねやまたもろこし唐よ伝へし船出して見るらんも　定家

新拾遺
たらちねの親のその子の葉に枝かへりかよきならはこの花　読人

今案
たらちめの歌と涙こそ我かく思ひの下にかへるしき

蔵玉和歌
叔母顔乳母水のえの心

後拾遺
たらちねとたらちめもやたらちめふたりの嘆きしき　墨染

拾遺
たらちねの親のいさめしうたたねは物思ふ時のわさにそありける　人丸

いふとはいふ子にしなくしといふなり

あへしたらちねは父母なり母をのみ云

備に蚕乳扱と云乳房と云なり親

なりそともいふ事便事と云り但親孝と

伴人の事をいふ

千載
たらちねやまた雨やしてかたみとおもひしかたみに命ありし　頼政

風雅
たらちねの花のよもひすかひそ久しく待ちしわすれ　為相

○老子經之心ゟ

あみちはもとあつしかまし六子ハ眉白髪ハ歟ぞん　水孫

出ちちは深いもとこれ渓流にとて三鳴子や子ハ父を先渓せらけ　々ゟ

是ハ父廿めて子ハ老とかみまと孫子御佛ハ

若うして御弟子ハ老人より見心ゟ　慈法

一　あふきたて通つる

打つまべ々あ梅さにきるるたてあつる三世の仏り花てはつゟ　日

祈る御法や君か代のさかゆ　なか流れわ行きさに云雲

行く人の舞子ふしきと薬ほとせ花さて通つる花も之れ春の　日

権つむ山法の春よね道にかる曉起の上苑のあとく

一　たゝと尊キや

呉竹の林ハ徳ゆゑ生すぞ　雪は世の分れてゆへ見さきさ　日

君さとよ行くとるかれたる尓さかつしよう納まるるたてあさると　ある

出ちちは己の款の流くまる清吉野の弥ハ分んるのたりとし　仲左

一　たんせう　誕生佛

嬉しきと卯月の七日明らか目やは世よ仏生も延し　宝家

一　たゝしむかん

あおちし姫さはとて久んまる此海妹と待へき月ゟ　慈法

あもしもあかハ八幡三所の中にあかう姫とゟ

よハ大慈菩薩の市女弥切息此儀也

一　あ成酒

倚乃揺ひあるは君か代とおかし姫よ住てそこ　留

打掃　儀秋

一　たかのつま

あくとらり達磨とさ出れる君あまよ法多猶まうて六も歟　々ゟ　仏法太郎

出孫ら

一
袖中抄
恋かつよわりんと云も非なる故かあらず付さへかゝる源氏に
たまさかにまよふは書とおもひて云かや

一
良玉集
恋ふる国に名を管絃の技乃戸ハ花とふる所に入の人そかなしむ

一 鶉なく里
鶉なく枯野の尾に荻咲積に牧
鶉よとりさえ分りてもいはねもとを長 誰かわかる春のはなされ
おもひつる花ハ花乃ことそれ巴 妻ハ恋やみて人の孤能の郭公
花咲ハ山のもとに浪出しく吧 秋の積の荻のことそれ巴

一
まま
鶉なく枯野名高き鳥の声なる帰るへくとまりくるそ ひさき

一
日
光またみへ夕ゐ乾かそ霞ハ鶉なく里付の霞も蔵なる

一
秋造
足象の山付る里孤しく鶉なく里付よ花乃尾すゝ 一色 え浦

一
うつ八思ふ花あへの郭公たつ続付の雲花海うひり 八宗流

秋深き鶉なく続付の荻にて鶉に分ハ松家んらら 揺られ 山家記
月次
足息もよかのくへと三略江の鶉なく風かたら道の 出し

〇 鶉衣
旅中へるか持ちし雲見かみ月かけと独かなしみて 秀雄
拾遺
立やらハ月けむそうちけれて旅の家に秋の空に飛

一
拾遺
霞あつ深山の里風ひし我ハ里として鶉やとく出家 うき紀

一
鶉鳴も

今宮か
色絶して人念通ハ花鶉なくして月そう秋風濁かれ

一 あさちふ

支考 浅茅生のあさちふく雲井絶間より身にしみて初の村雨ぞ降る　後京極院

一 あさゆふ

新古今 朝夕に思ひみだるる時しもあれ寝覚めもしらぬ夕暮もなし　前大僧 雅之

あさくふく松の嵐や朝な朝な絶えぬ夕と帰るさの空の　摂政太政大臣

むかしを思ふ心より行く陽を車にのせされ　竜

くさえたり源氏ハかく儀あるにもまさり思ひわするる　定

頓阿くるあさくるもの

一 たゆり

拾遺之内 藤乃みちハいつくへ行にしと　絶えぬ事なれ仏とも　えんく

注ニ 奥義抄 有職 儀範 安道

一 たむけ

冬萩の源氏ハたむけくさんよ

旅人とそおもふ海辺ねさせさせぬハ男と程て旅衣をも枝見　西行

一 くもゐにて

月清 月星ハうけかめりてうつりすれハ我世てしひとり成けり

注ニ 旅の御たむけ

続古今 若をとうのもきえぬ法をあかりてハそて袖を結ひ至る　宗尊 親王

一 くもゐのさわき

奥儀 新撰年中行事の秋の夜を過ぐるものをと　順徳院

奥儀抄ニ 古今大哥所乃御前の冲よりかかりなり

乃哥とそ入羅まつるせの紀をつめ出ハ年中行事

日

いつくしん事

新勅撰にいつくしまの神まつりかつらきの御神第一代よりそよ

みくのいつくしきと云り

一 たからの御事 玉八尺鏡 草薙劔 此三種也

反操 次にこれハ玉ハふさの〳〵ますす瓊人乃寶とかんへたるしるし 類人

崔按 おほ世のためし永代あらうる也國家ハ弘りみかくこゝるも也 久保

新千載 古りをて立かへる御たからの新治の寶ハあめさかりける 俊光

一 人のみやこ

伝家のチタ 行つ田舎ハとつらき地うき 何とか都みやこぞ於あれさへ 長

東まて春にかすみてかへる都ハ古のみこそ我拍をいひ まさん

鶯ハ田舎の谷の巣なれともたゝうちなくハ都なりけり 久重

一 たみせ 田盧ト云り

袖中抄 みつのたとにハ都への申ちふみこそこうにしくりたるて書せる 冥也

田舎也田ふせとて我ふかくあやにこゝとこと云御 外人

しるのよしと云なり

一 みやの紀

今義 山里ハたのしのさかにくしみきよしも得のてあるも常

都乃紀とハ田舎の浮也さいとハちはさ紀つらかすの利

籠此こあハ雅也とはさいてあやをしのへハ迷稲ヲ

云此万葉集二十ト云し

一 みやこぶり

源氏より中宮御いつ〳〵まかく渉たかの引さとき

一 やまびこ

草枕ならぶ旅寝をかさねて 古里も霜夜の旅はつらからん

旅ねするいほりもなくて 思ふも遠き人のまつ旅の宿

夜さむなる枕もさびしき里 山本の萩吹風に旅寝して

戸ぼそ打時雨ふる夜 情くむ旅人あらましかば

しぐるるも宿かる山のそと 旅にしてねがふ旅寝の夢

伊勢物語
唐衣きつつなれにしつましあればはるはるきぬる旅をしぞ思ふ 業平

新古今
わすれじなおなじかきねのむかし萩霜枯まさる 馬内侍

新勅撰
霞わけあかず見る天乃山の白雲は花かとぞみる旅人 法印尊誉

一 くめんせん

朗詠
班女閨中秋扇色 楚王台上夜琴声

一 たまゝ

毛利
卯花の垣ねにまがふよ咲にけり 里は何国乃玉河のかみ 也

古今
手折てみば落ぞしぬべき秋萩の枝もたわゝにおける白露 読人

拾遺
秋萩乃えだもとをゝに露霜のおきゐる夜はねられざりける 家持

○ くまつし

拾
いたづらに猿の桂のさくら雪 也卯花のかくる垣ねやたまむらん 日

月清
降雪にまがふまつら松の葉のかくれもなき浜千鳥 家隆

千載
白露もさゆるよしのゝ小萩原すすきの下葉乃小萩末をしのぎ 花伊

続古今
ひさかたのくもゐるを山の秋風ぞ吹小山田の庵 経信

一 くもとやり 婚婿 婿

玉造ニ姉　姉勝文誤揚柳

一 たるひ

風雅
朝日さす軒端乃雪ハ退消てたるひの末ニ落る玉水　院之

千五百番
ふるさとの苔のいはやのしつくにハきえぬたるひやかつむすふらん　俊成卿女

源氏
朝日さす軒乃たるひハとけなからなとかつらゝのむすほゝるらん

新古今
立かへる山の峯ニ春来とも杉の下露たるひなるらん　守覚法親王

風雅
降埋む雪ニ日数の杉の庵あらハにさけ山陰の庵　太政大臣

一 たるみ見ん

呂氏春秋ニ是ハ上の子ニ厳の落也とあり勝よりかれ
殷照云王のみとハ池の其とはしの焼ハよ出し給見ん

と云两方ハ雲水せの罪とそむとせ給兄のうへて
此兄より出る者たりけりに子厳りも出らと経り
ありと云有た云り家給りたるを井とハ任にふ
中納より日ゑ給かの元せ給給一の春也給中将

くれる

一 たるらひ

森髭丈木
老りくる梅ハ宗の分り　鶴毎乃手洗乃水そりうら梅侍　衣笠

一 たるり落女　河内

玉葉
龍田山嵐のとともすゑ帰乃里も道も常そ道へ　よ　行一上人

一 たるゝ

月清
たえ人くせ世よ給そこくはなつ見むかうしれ待の色

一 たら露

一 荻吹行田ハ去年も今年の中秋 秋 ゆふしくもりし八ツ頭き日
古今 ゆふ霧に衣ハ田也にしめ夜ハ待ちえてこそ見ゆ 敏行

一 ゆめとゞろ
越の世一夜ハかたそ夢そ書巴

一 ゆめてぬ花
きそぬきこに霧と花の錦此福

一 守も地ぬよ
続拾 ゆめちぬかぬ露もろ根の衣そ雲にちかきかゝぬ 雅親
伝撰 夕暮やハ七夕作めにゆかしくて立ぬふりさいおへとたのみ 忠

一 たけ 長之
月清 うぢきとゝいふも花物に思ふものかけと月に残りぬる

一 たい面
月清 性とハ隔と告て行ふるを心み送りまぬ明ぬれ

一 たい鯛
まま 長尾ののき浮の浦浪よ鯛浮の小舟にの色あいら 中務家主
新六帖三まま わか子ハかこきの鴨かな網のたみかさみ花ハ会あれ 鶴 後人

一 とゝ家
拾遺 伊予のむ寒さふりみの恋乃秋さむくせ宿よ我ハ独さそ ようう 敬 犬房

一 たて 蓼

新六
誰かみてふ川邊のたてのかりて紅に名にもしらしき秋の水かれ　衣笠内大臣

拾玉六
水そのかはらに通ふ鳥の足に何て秋を知るき　摂政

一 たはたく家

合点
朝寝髪をかゝる撫子ちとをうつけくらきぬの記念にかけて　三百

一 うたゝ　う

むかしといへり奥儀抄に其時也萬葉には當初ト書り

詞にはやそのかみと紀氏清水記

見よ知や菊をそのかみ秋の色　柳

そのかみは後と思ふも心のうちにいそのかみき　寂蓮

引つれてかみのむかしそのかみ思ひはいつしかそのかみき

拾遺
うのかみ人は我とし昔の雲かくろう紀　中務

看寄二

行人は當時あとくいふ処とかかくやむかしの別り語

是もいふ儀也

大和物語に生田男の海辺とあけける女のうたに家にそのかみ

親乃侍みやこをさらぬかくと名は嘗時のたゞさあけと

(月清) さのかんや徳を用ゐし八志め子の乃ゑへ月をへてと物忌ゐり

一 そこそこの

源氏三宮方の精うこそそうしとすゝ婉たらんらとおり

(香) うこそうしと志をうれ子給ふ給ふ松ニ面うちて御りくるめる雲居 月

(作) 持その鳥乃往慕詠り 巴 うこそうしと詠る御乃峯の茶 月

(慈鎮) めそとくるてにや月を出づき ね うこそう此乃たらく吟将 長

(百首) うこそうしんへよろめ乃下草をかられ八うらせに此静く 定家

(続拾遺) 志を世のやうこそへうぞ紀浮雲の見にうろう雨とひと 行家

(月清) 君うかくうりつきてしかり時も何迚うこそうしと明き久忘れ発

(新古今) 称無月風よ紀衆子乃ちるなる時八そこそうしと於く物をうる 後京極

(日) そこそうし思ひ侍ちくへ盃を見世八出にのちうろうそ神八ね出ぐら 慈円

一 そらうおふかな

明やとて見むすゝうる月のあはれ 咲ても見おわし出会へ八うぞむ

(古風体) 蓋乃出きさひのあとのそ見ゐ

(歌羽) 秋月うわくれさ面子の出を所るゝ見おわりしもの君八 忠之

(日) 五月雨の見おうろ出てもの郭公鳴よあさくなゐ八今もそらぬと 内侍

一 うつたのめ

(千載) 何せむよ見たのゐをそうしへらん思ひの絶たる言もなかり 有家

(日) 侍さし志をらうそうたのおかふる尉て思ひのたえぬ宵月の名玉章 通親

一 そうつゝめ記

春を待見たゝこなし梅の花
まれ
毎年ひらく花の嶺この何あるか世の梅乃ゆきらむ 仲正

一 うら
於き
白雲のかゝるやまもとさへ人を山乃端にまちくらす 読人
故の義
この戸をはやくと云かへりて見るこそつる鳥のなく声 読人

一 うら花桜
あしかきに見雲にし見ねぬうるまし 紙

一 そともに 日本記ニ南京面ニ小背面ト云リ山院道ラリトモト云リ
里なまてよそとも見て初付句 柏
全部
山里はうきよの當代にも岩の水をたゝねよてみぬさ
同
唐さすそとも見當る風さくひねるこそ當世の 実泰
全部
山深見人も不記宿哉それとゝもの當に秋の果にけり
萬葉ニ外面ノ國ト読リ綺語抄ニ外面とかく云歟
納言ハ前抄ニ家の門乃外と云リ綺國方抄ニ
家後ヲ云と云る名抄山里ノ門ヲ云ル也 首

家の風　續奇

秋霜のうすもいつもそのまゝ花の咲けるかな淡しき夜ハきゝ　くり
山吹のちらぬかひもなけれ共落花をかなしむ心ハ
是ハ家のかくし哥也

一　そなたこそ
東山寺雨
うき薫ちるこそもなき花ハ神も惜かゝりけれ　秋
新古今
別路ハ雲井の禽に成ぬともそなたこの風の便をまたれ
月居
そなたにもおなし紀のさけりや月かめる宿にもたへ流り
日
物白さすそなたこのそら花老結山陰てらすわか　紀

一　そむく
描写そむ秘さひし　慧
霜とけハ憂たりし宿さひしき　わすれしもそむきし中道
雲喰風そみてりそめ

和哥
こゝろの世を背くと云ことを思ひわたれとおもひなさる　亦武
日
とりもなをさす心ハ背く浮世のおもひて秋月の影にかくそ　太淀法師
日
あきらめて世を背き捨てたる身なれハ思ひの中に　野老
新古今
何とてもうたかたのうきハ世をそむけは思ひきり　行尊
新古今
消ぬへき露の命を待ちて捨て世をそむきける身なる　寂蓮
大和物語
さしても捨かぬ花ハ世を背きけり身を離れる事なき　家隆
日
うきもとめて伊勢の世をそむきける思ひなるかな　日
日
秋の世のなかやつらき花すさむ也心の中のありつゝもれん　志らせん

一　そむけさ
背くとて雲をへたてゝ月に人のなれぬも身の紀伊の流より　秋そら
まさ木
そむけさ　賤のしかり　蕎麦
うち柳さしてもなきのれ深みのそむけかしかんのうかるすて　後世

一　そむく心
うち柳さしそむけ深くてあらんかく心の世を　後世

千首
夜もすから行山畑はなれくる枕 続しもなほ紀そらめのけしき 為家

新古六
色とてやまさきあねそその末葉唯行くらきこと年ふる 時雨 康衡

玉葉
紅葉散るそこのうけみちらぬえくよ霧そつゝ雪ふる山人

一 そほちし
源氏若菜の下巻に上天皇にあはり給
於冬月よ衣袖の絶つ御幸為に朱雀院に
いてそしおつ御歩行ありし朱雀院御用意に
見物紅葉アリハシワタ殿なとよ錦をしきこ延ま
なり

一 そらひ山のこと也 亦ヲイスカイタルコトヲ云 萬モソ也
今集
あしひき山や雨もとなそ流くそふそちにそ通ふこの見へく こゑ 定家
京極北まま
深花咲や嵐の風の山ころにふみ雨ふ花ちるし香 家隆

京極
宇治の流れてはやき瀬々のそひよる渡はの風 為氏

一 そはたて 側耳 欹枕 峙山
毛利千句
ねられぬを思へそはたて枕をせて 巳そそろ枕の嵐ぞ聞 日
千五百番
そよそよの枕に通ふ夜半の月 扱鏡の親世にそらて涙あり 日
暁は清き枕をそはたてそ嵐につき鐘のをとかな 後盛
玉葉
窓あけて山の端かけの風の中に枕そはたてて月を見る 信実

一 そゝや
ひはしかく萩の末葉の行くへにそそや秋と風の音すなり 寂蓮
新古今
高円の野路の篠原末さわきそそや凩けふ吹ぬなり 基俊
反撰
吉野川そそや村雨ふりぬらん岩こす浪は音まさるなり 日

一　そく見　深渉月

伊勢物語
わしも人の心ハつれなくて　ことも有洞をそく盃り　致

月
露落て柳やうくる花さかハ　そくおもひも春ならハ　月

湖渡春盃中

諸ともに聞しは涙さへ濡るゝ色ある名にゝつき

さゝなミや新おの雨そくやまさにわか書出乱　行教

鬼毎水首そやうく盃酒

一　そよく

雨さ明てそれ告けるみちうらめしき篠乃仮寝の夜

古今
独して物を思へハ秋の田の稲葉のそよと云人のなき　みつね

新古今
篠の葉ハ深山もそよにさやけとも我ハ妹おもふ別きぬれハ　人丸

花薄しろくも見えて秋の世の吹かせにうく獨ねる夜ハ

秋乃終り行らうそよく風の音よ花とそ見へてかもし

新古今
君来すハ独やねなん篠の葉の深山もそよにさやく霜夜を　清輔

一　そよ

そよやはつかの梅の匂ひ　桂

夏もいつやいるそ吹ぬらん　家

新古今
哀れ乃秋風ふくハ荻の葉のそよとしもなき音ハしつけき　西行法師

後拾遺
今ハ唯そよその事と思出て忘るはかりの憂事もかな　和泉式部

新古今
うらかれぬ葉の夜のそよさへ吹風落る星からかの露　定家

一　そへ物

今日そへ今日暮ぬ　頌

大和物語
けふそへに暮さらめやハと思へとも絶ぬハ人の心なりけり

寄
越へぬるもこそすまはかつ見え角もそれハあまたの袖にまかふさ　きこえん　読人

一 そふ　そゆる　添

春日野の小松か雪をもりそへて思ひの千代の花咲はくり

一 そ連

雨の夜花をしのふに小夜の寝覚　紙

月清
うち絶えて高き夏の名残をも待つ夕暮の雲のかよひ路

新古今
数ならぬ身のうき雲の絶え絶えに嵐そよく秋の山風　良暹

わきて思はん中にさても更に旅の涙かな　紀貫之

新古今
其ゆふへ霊の嵐もうつろひぬ今朝や千鳥のなく月　法眼 宗圓

一 そこ　底　又　深き

古今
底ひなき淵やハさはく山川の浅き瀬にこそあた浪ハたて

月清
おりふしの庭ハ君か代も深き緑の色そ増りける

古今
うちわたすをちかた人に物まうす我そのそこに白く咲けるハ何の花そも

一 そて　袖

袖の内に納る風ハ扇の事也

新古今
さゝ浪や志賀の山風の吹くハ袖にかはるゝ秋の色　読人

月清
夏衣袖の下水よのまにも秋を迎ふる花の露

万葉
大宮人月日ハあらかしむくら袖かへすよし

○袖のあかみ

唐舟えも抱きこうと将 雪月花袖乃涙の秋露く 秋

東路 見る嘆しも見る古袖の雨 類 入白さ香其の下露に風之く 月

○そでのこほり

やうう羽右くに時乃多味起き袖乃涙氷身をそてるか

○袖のか

香句めくに浅くとき此袖をきそう寝に紅葉かり

老つのむしる也て薗霍にても讀ても可を

深草ノ僧正乃歌有り未佐乃るも一首と讀侍く

信とも亦乃うも此袖とくもて集めるをと

さるても唯(?)浅くもの袖と云ハ早(?)下の多也袖から

まへく字(?)也かの多り

月清 ちとらふ孤ら人の袖の香此をれと斗世伊门残らん

神中 おも母る袖日つとおられくり多(?)く香此る也

○そで記(?)

是袖多水了記まる以来の也 読

古今 袖記らく浅乃多此ろ乃の春ろ乃風やねらん

むすひ出ての袖記浅くらう記かも若出て來俵都か

○うそ浅く 袖濃也袖ろうとくも袖水かつくなる

廣世川袖つくたり濃(?)袖ともへかつめてもう都かるん

七夕の袖濃ふうのあつやき乃川世乃やよっても乃ととまよ

一 そめる八 筑前

○そめ川　在筑前　一山の雫

拾遺
筑紫なる思ひ染川わたりなは水やまさらん淀む時なく　真忠

新古今
いかなれは人の心をそめ川の流れてわれも袖ぬらすらん　信濃

○そでのみなと　筑前

新勅撰
潮入て袖の湊のあさましくよそに里ある宮も袖ぬらすらん　家長

続古今
ちとり啼袖の湊をこえてし舟よりの程覚行　定家

○そでしの浦　出雲

続古今
思ひそふ袖師の浦ゟ引綱のめくりあふ夜は遠くなりけり　成茂

○そでふるやま　大和

をとめこか袖振山のみつかきの久しき世より思ひそめてき　人丸

千載
わきもこか袖振山も春きてそ霞の衣たちわたりける　匡房

拾遺
乙女子か袖振山のみつかきの久しき代ゟ思ひ初てき　人丸

続後撰
おのつから霞吹とく風に乙女子か袖振山に春は来にけり

続拾遺
をとめ子かかさしの山を来てみれは花の袂はほころひにけり　侍従

花の色をそれとも見えす乙女子か袖ふる山の雪の明ほの　後京極

源氏
唐人の袖ふる事は遠けれと立居につけてはれとはみき　按察大納言

乙女子も神さひぬらし袖ふるき世の友のよはひ経ぬれは

とかそ昔の記念とはなりて羽衣袖振山にまかへかき

おほく人のわか萩の記念とも花薄袖ふれはやまする

一　そて川

後撰
涙こそ人やりならぬ袖の露　かたへにて袖無ゆり

夫木
仮寝する夜の雨の床ぬれて夜はの袖にて

京の家

月

一

後京極
人志れぬ河あへ浪に我影ハあさく袖のしからみそ　具平親王

京極
下葉まて露も時雨もそめつくすかゝる山のもみちはよ　定家

何ゆへに思ひ出けん月ちめ袖にそうわかれ月まてはまた　後人

一　うかれ猫

嵐ふく山ハ子すゝ鐘の鶏の声に雲消てそなかめ　頼

一　そなれ

之吟
後京極
水ハ縁にしる山ハ志るあまの長月の夜明てそなれにし雪　
猿なしてその岳のまつよ山かぜあけのそなれの浪のなく　猿人
ちりし雨の紅葉の色に山をも吹あらし　喜

月清
山本のゝ苗代かわれ月のかく漕出る沖ハ雲霧てくら

嫁語云そなれ難波の皇代百まて流の宮之
乃荒さらわれおかなれ之水の面にかれ藤
の月にて移りそなれまおもかしくり
そなれハちハさなれをわすの家やおや
志なれを云ていうて渡りこれ寺とおもひ

よりへまきとわり

一　そこなふ
流る紀つるを舟の涙のそこなふれ　慕風ハいろふかきの歌

一　そめき

未木
みかさ山やまのはをきよみかも紅葉の色ふかき雲にこそ見ゆれ 元
日
まもるへき人なきやまのもみちはゝ誰かそめけん神のふるさと

一 そめ

深緑そむる松風に時雨あり 衣
朝霧は山深くそめわたり 巴
六百番
染むる色の菊の紅葉はうつろふとも梅か枝にほふ
此刻菊乃五行に陰陽は叶ふ物なり
爪雅
男女わかれ染色ちるものなり浮世はかなくも染ておもふそ 宗祇
花染 千染 薄染 唯染 濃染 縹染 下染
上染 目染 然目ニナシ度あり 深染ニクリツメテ云
くれなゐにそめてうつろふ花のあり
染衣
世のなかにひとのこゝろは花染のうつろひやすき色にそありける

麻の衣をうつし深く行けるは夜のまにかも
なにことも世のうつりかはる色にそめて
我か袖にうつり深くなりゆくへかも
中々にうつりかはれるよそ色の月と花とに染ん
西行

一 そめ

新続後
色かはる袖もかはらぬ思ひゆへかな 日
伊勢物語
春日の野のわかむらさきのすり衣しのふの乱れかきりしられす
雪深き松の梢の山深く
花の色にしみ風や梢の身にしみて 日
宮城野の萩乃ふしもとあらくうつろふかな 仲正
仙人のすむ宮にうつりかはるらむ 西行
花の色もしれぬ仙人のいろはうつろひ 仲文
私にいはく染の川とは筑紫の国にあり

○そほふる
玉葉
桜かゝみえぬやそほふる小男鹿の妻とふ声のあはれなる哉　太貴

一　そり　梲
新葉山家
千はかんにはてそことのそや縁もなくて捨りしなる是そ世　白雲

一　そのかみ　往昔
続拾遺
東路のそのかみかくはまなしも初坂道は今こそは絶せす　相経
日
深草のその家をあはれとそ秋をさへあはれとは　平高家
金葉
をくれつる椎のこゝをかつらは常絶のかみはまた　まよ　師賢

一　そこのかみ　相州
新千載
住初し常盤の川岸のかの月おもなくして見る世の寂かなる岩　海結

一　そのまゝ
続拾遺
君のみゆるはるかなるに兄の志けかんさへてあはれの　頼人
此頃まて流れのまに　てまつさ

一　そのゝ　ゼンザイナリ
新後拾遺
花園のをかとは秋虫のさかしくなんなりけん
玉葉
見る猿たえぬ花のにほひの花初の露をみる　為家
竹の葉かすかなる風のみえよかはんなるそ花ふかきに
千載
とりかへ陰のは冷の山雪　霜のふかきそ秋哉調　能人

姫ゝ世や八四方の宮は堂は際体

鵙乃ぬ海ちし此こえの鳥紅葉ふれ花その捕とらん

○ その小蝶

夏き野を拾慕のみ　幾巻の菌は胡蝶の表そ

一 そのあつさ

手をゝる
被さし夕おき世のあ女之恋無　頌そのあつき紙宿とふせよ　花

千載尺教
色てハそのあつさもらぬれ　や　別し人こかへりそりなは

葉さんそのあつさの得行の園ともて瑞法のより　次
　家隆

是ハ法厳り南そて今張の法義経書ちゃて
　教家

一 そみくた

百首
わやゆきて嶺ゆりくつる車淋すらやおもみくさ　小大臣
志つる身しはたこや山路をそなへくさゝる月は(?)ふやすきつ　歌船

一 そとも　平兼盛

百首内
定なり妃世の碧桃香るまて日とへて雨せる相をそのそとにたよ　家隆

六帖別六条家
立野一振乃年却婆も枝果て歌るむ念の綵墓　衣笠内大臣

一 そう川

百首
かりしかくふそく信数之申数も前いさしなりとさへ門とる　信実

後撰
足引乃山田は僧都ら枝く極ら海はねもの飛もれ　らさよ　読人

山田もるそうの身のあはれなれ　秋果ぬれは問人もなし

一 うちまし

伊勢物語
竜田やひとりすめの刈そ程北　そうちまて北ふやけかのみ秋の風　長方(?)

千載
盛なけれとも我見風乃こゝろ躰乳路住吉記当代に　侍從

千載
そのまゝ紀乃そなれくるとし也吉野の浦かなすゝめかしてくる　俊成卿

月詣
一
呉竹の都乃風よそ孤なるそよ春は秋をなこる也すかな

新古今
一
さ比乃やう吹風ものなき秋雲かへるや秋ハ月人之ハらり　寂蓮

信京
俊頼乃いまの秋乃夕のそなきも松孤しもありけて秋恋めや　定家

一
すかもの夕雨

一
陸奥乃おくゆかしく我おもひかつのそとの濱風　西行
うちあゆた

一
乃こり田ハそ志とまる和もの雁ゆつかとかそてま苗記てん
そこあひ十代と一段下もひきそ志乃二十代と
そこ志の三十代もとかく可半代から御み半
代ハつそつ当ゆつも信ハそとも田をかうこその浦　ゆきん

一
田鶴ハ人ひとそへんを信とくうつくこその中とひあらの

一
兵の田鶴うつまふハらりよ座とうつと云や

一
そこ乃　鶴鳥の骨ヲハクナリ

拾遺愚草
志ても乃ひあそ乃こゝろも志乃何か鶴にも鶴をといる行て　定家
恋わすれてきとも折つる袂たり鎖乃まちかねやそつうらん　うらまし　日

国立公文書館
National Archives of Japan